

茨城県教育財団文化財調査報告第319集

上谷田遺跡

一般県道高崎坂東線バイパス整備
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成21年3月

茨城県常総土木事務所
財団法人茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第319集

か み や た
上 谷 田 遺 跡

一般県道高崎坂東線バイパス整備
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成21年3月

茨城県常総土木事務所
財団法人茨城県教育財団



遺跡全景（南西上空から）



出土土器

序

茨城県では、市町村や県の枠を越える広域的な交流と連携を進めるため、また県土の均衡ある発展を支える基盤として、県土の骨格となる一般国道や主要地方道などの、幹線道路網の整備を進めています。

その一環として、茨城県常総土木事務所は、常総市杉山において、一般県道高崎坂東線バイパス整備事業を計画しました。

しかしながら、この事業予定地内には埋蔵文化財包蔵地である上谷田遺跡が所在することから、これを記録保存の方法により保護する必要があるため、当財団が、茨城県常総土木事務所から開発地内の埋蔵文化財発掘調査事業の委託を受け、平成19年9月から1か月間にわたってこれを実施しました。

本書は、その調査成果を収録したものです。学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深めるために活用されることによりまして、教育・文化の向上の一助となれば幸いです。

最後になりますが、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である茨城県常総土木事務所から多大な御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げますとともに、茨城県教育委員会、常総市教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し深く感謝申し上げます。

平成21年3月

財団法人茨城県教育財団

理事長 稲葉節生

例 言

- 1 本書は、茨城県常総土木事務所の委託により、財団法人茨城県教育財団が平成19年度に発掘調査を実施した、茨城県常総市杉山1385番地ほかに所在する上谷田遺跡^{かみやた}の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。
調 査 平成19年9月1日～9月30日
整 理 平成21年2月1日～3月31日
- 3 発掘調査は、調査課長瓦吹堅のもと、以下の者が担当した。
首席調査員兼班長 三谷 正
主任 調 査 員 小林 和彦
調 査 員 江原美奈子
- 4 整理及び本書の執筆・編集は、整理課長村上和彦のもと、調査員江原美奈子が担当した。

凡 例

1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第Ⅸ系座標を原点とし、 $X = +13,880\text{m}$ 、 $Y = +10,120\text{m}$ の交点を基準点（A 1 a1）とした。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA, B, C…、西から東へ1, 2, 3…とし、「A 1 区」「B 2 区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へa, b, c…j, 西から東へ1, 2, 3…0と小文字を付し、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1 a1区」「B 2 b2区」のように呼称した。

2 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は、次のとおりである。

遺構 SI-住居跡 SK-土坑 SD-溝跡 PG-ピット群

遺物 P-土器・陶磁器 TP-拓本記録土器 DP-土製品 Q-石器・石製品

土層 K-攪乱

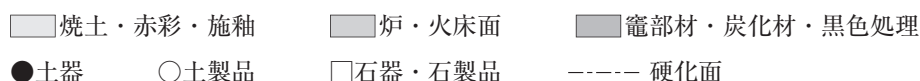
3 土層観察と遺物における色調の判定には、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄著 日本色研事業株式会社）を使用した。

4 遺構・遺物実測図の掲載方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は200分の1、各遺構の実測図は60分の1の縮尺で掲載することを基本とした。

(2) 遺物は、原則として3分の1の縮尺で掲載した。種類や大きさにより異なる場合もあり、それらについては個々に縮尺をスケールで表示した。

(3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

 焼土・赤彩・施釉 炉・火床面 竈部材・炭化材・黒色処理
●土器 ○土製品 □石器・石製品 ----- 硬化面

5 遺物観察表・遺構一覧表の表記については、次のとおりである。

(1) 遺物番号は土器、拓本のみ記載の土器片、土製品、石器・石製品ごとに通し番号とし、本文、挿図、観察表、写真図版に記した番号と同一とした。

(2) 計測値の単位は、m・cm、kg・gである。なお計測値の（ ）内の数値は現存値を、[]内の数値は推定値を示した。

(3) 遺物観察表の備考欄は、土器の現存率、写真図版番号を記した。また、整理時に遺構名称・番号を変更した場合の旧遺構名称・番号についても、ここに併記した。

6 竪穴住居跡の主軸は、竈を通る軸線とし、主軸方向はその他の遺構の長軸（径）方向と共に、座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で示した（例 N-10° - E）。

目 次

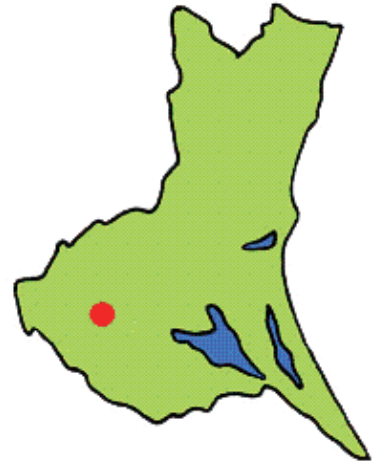
序	
例 言	
凡 例	
目 次	
概 要	1
第1章 調査経緯	3
第1節 調査に至る経緯	3
第2節 調査経過	3
第2章 位置と環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	5
第3章 調査の成果	9
第1節 調査の概要	9
第2節 基本層序	9
第3節 遺構と遺物	10
1 奈良・平安時代の遺構と遺物	10
(1) 竪穴住居跡	10
(2) 土坑	22
2 近世の遺構と遺物	24
(1) 水路跡	24
(2) 土坑	26
(3) 溝跡	27
3 その他の遺構と遺物	28
(1) 土坑	28
(2) ピット群	29
(3) 遺構外出土遺物	30
第4節 まとめ	31
写真図版	
抄 録	

かみやたいせき 上谷田遺跡の概要

【はじめに】

上谷田遺跡は、常総市の北部、旧石下町域に位置しています。当遺跡のある台地は、鬼怒川の支流である将門川の右岸で、周囲を鬼怒川から延びる樹枝状の谷に囲まれています。遺跡は谷に向かって低くなる斜面部にあります。

当遺跡のある旧石下町域には、奈良時代や平安時代の遺跡が多く存在しています。当遺跡の北方1kmには、奈良時代の役所跡と考えられている国生本屋敷遺跡があり、当地域が古代の政治の中心的地な場所であったことが推測されています。また平安時代の武将である平将門の活躍した地としても知られ、伝説が多く残されています。



今回の調査は、県道を整備する道路予定地内に当遺跡があることから、工事に先立って、遺跡の内容を図や写真に記録するために、茨城県教育財団が発掘調査を行いました。

【調査の内容】

今回の調査では、奈良時代と平安時代の住居跡（竪穴住居跡）5軒と土坑2基、江戸時代の水路跡1条や溝跡1条、土坑2基などが確認されました。



写真1 北西方向から見た遺跡全景



写真2 調査前の風景



写真3 第2号住居跡調査風景

写真2は調査前の風景です。草が生い茂る向こう側に、土手状の高まりが見えます。これは吉田用水の土手です。吉田用水は江戸時代の新田開発のために掘削されたもので、河川に挟まれた当地域の水とのたたかひの様子が偲ばれます。

写真3は、竪穴住居跡の調査風景です。竪穴住居は、地面に穴を掘って床を作り、茅などで屋根を葺いた住居で、奈良時代や平安時代の一般的な建物です。4か所の穴は柱を立てたあと、北側の逆U字状のものは竈のあとです。



写真4 竈の調査風景

写真4は竈の調査風景です。竈は今のコンロで、写真5のような形をしています。調査では完全な形で出てくることはほとんどありません。竈は粘土などを使って形が作られていますが、写真4のように、粘土とともに使わなくなった土器などを用いて、より頑丈に作る工夫がなされています。

【調査でわかったこと】

上谷田遺跡の存在した旧石下町域は、遺跡の営まれた奈良時代や平安時代には下総国岡田郡（のちに豊田郡と改称）であったことがわかっています。今回の調査では、当時使用された食器（須恵器）の胎土の特徴から、地元で作られた土器のほか、旧新治村周辺の窯跡や東海地方で作られた土器も見られ、当時のモノの流通の様子がわかりました。



写真5 現在の竈の使用例

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

茨城県は、産業・経済の活性化や県全域の発展を図るために、県内の交通体系の整備を進めている。平成18年6月2日、茨城県常総土木事務所長から茨城県教育委員会教育長あてに、一般県道高崎坂東線バイパス整備事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会があった。これを受けて茨城県教育委員会は、平成18年7月25日に現地踏査を実施した。平成18年9月5・6日に茨城県教育委員会は試掘調査を実施し、遺跡の所在を確認した。平成18年9月26日に、茨城県教育委員会教育長は茨城県常総土木事務所長あてに、事業地内に上谷田遺跡が所在する旨及びその取り扱いについて別途協議が必要であることを回答した。

平成18年10月4日、茨城県常総土木事務所長から茨城県教育委員会教育長あてに、文化財保護法第94条に基づき、土木工事の通知が提出された。平成18年10月13日、茨城県教育委員会教育長は、現状保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると判断し、茨城県常総土木事務所長あてに、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。平成19年2月20日、茨城県常総土木事務所長から茨城県教育委員会教育長あてに、一般県道高崎坂東線バイパス整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施についての協議書が提出された。その結果、平成19年2月26日、茨城県教育委員会教育長は茨城県常総土木事務所長あてに、上谷田遺跡について、発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて埋蔵文化財の調査機関として、財団法人茨城県教育財団を紹介した。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県常総土木事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成19年9月1日から同年9月30日まで、発掘調査を実施することとなった。

第2節 調査経過

上谷田遺跡の調査は、平成19年9月1日から同年9月30日まで実施した。以下、調査の経過について、概要を表で記載する。

				9 月		
調査準備	土除	準除	備去	[Greyed out]		
遺構	調査			[Greyed out]		
遺物	洗作	浄業	整理	[Greyed out]		
補撤	足調	調査	収	[Greyed out]		

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

上谷田遺跡は、茨城県常総市杉山1385番地ほかに所在している。

常総市は茨城県の南西部に位置し、当遺跡の所在する旧石下町地区は常総市の北部に位置している。市の東側に小貝川、中央部に鬼怒川、東仁連川、西側には飯沼川が南北に流れており、またそれらに注ぐ支流が市域を縦横に流れている。地形はこれらの河川により形成された沖積低地と洪積台地に大きく二分することができる。沖積低地の多くは近世以来開拓と用排水路が整備された結果、現在は水田地帯になっている。鬼怒川と東仁連川に挟まれた標高20～25mの洪積台地は、結城台地の南端部にあたり、河川によって浸食されて洪積台地と沖積低地とが複雑に入り組んだ様相を呈している。

当遺跡は鬼怒川の支流である将門川右岸の、周囲を鬼怒川から延びる沖積低地に囲まれた、標高約20mの舌状台地上、及び斜面部に立地している。調査前の現況は山林及び畑地である。

第2節 歴史的環境

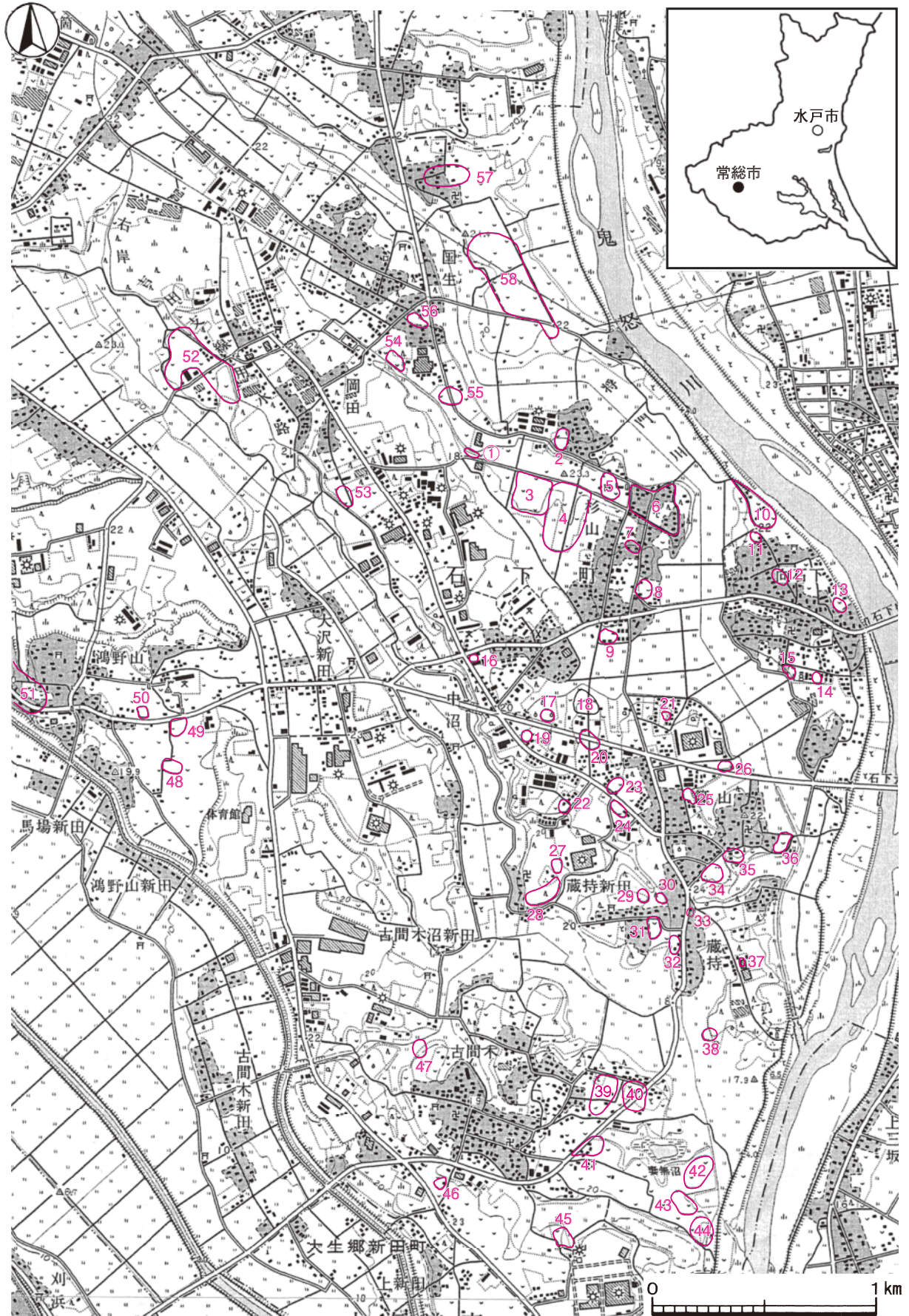
上谷田遺跡が所在する鬼怒川右岸は、鬼怒川から延びる樹枝状の谷によって、いくつかの台地に分けることができる。鬼怒川右岸地域は古代下総国岡田郡の中心地と考えられており、「馬場」「古間木（間木=牧）」など、官衙に関連するような地名も残されている¹⁾。ここでは当遺跡の中心となる時期である奈良・平安時代、及び近世の遺構や遺物が確認されている遺跡を中心に概観する²⁾。

当遺跡が所在する杉山地区は、周囲を浅い谷に囲まれた独立した台地上にあり、台地平坦面はあまり広大なものではない。周辺には古墳時代の遺物の散布が見られる入田遺跡〈3〉、杉山前遺跡〈5〉、坊山B遺跡〈55〉や、奈良・平安時代の遺物が散布する坊山A遺跡〈56〉、伊勢宮遺跡〈54〉、登戸前遺跡〈8〉、近世の遺物の散布が見られる日枝前遺跡〈4〉がある。

当遺跡から谷を挟んで北側の台地上には国生本屋敷遺跡〈58〉があり、1986年に石下町による発掘調査³⁾が、1988年には国立歴史民俗博物館による発掘調査が行なわれている⁴⁾。1986年の調査では、竪穴住居跡28軒のほか、方形に巡る断面箱葉研状の大溝（溝の上径3.46m、深さ1.5m）や「丈」の墨書土器、朱書きの土器などが出土している。この大溝は1988年の調査によって、古墳時代前期の豪族居館を圍繞する堀であることが確認された。また、7世紀後半の方形に巡る溝跡と掘立柱建物跡が確認され、初期官衙的な性格付けがなされている。また同国生地区内には平将門の伝承が多く残り、伝下総国亭とされる延喜式内社の桑原神社がある。

谷を挟んで西側の岡田地区には、保持山遺跡〈52〉、前原古墳〈53〉がある。保持山遺跡は約4ヘクタールにわたって8世紀から9世紀にかけての土師器や須恵器が散布しており、大規模な集落の存在が考えられている。南東部の向石下地区には東浦遺跡〈10〉、堂ノ前遺跡〈12〉、一盃館遺跡〈13〉などがある。

谷を挟んで南側の篠山・蔵持地区には、小支谷に面した台地縁辺部に遺跡が集中している。布目瓦や窯壁の一部が出土した塩田窪遺跡〈30〉や、鞆の羽口が出土した石塔遺跡〈27〉があり、前者は瓦製作に関連する遺跡、後者は鍛冶工房に関連する遺跡と推測されている⁵⁾。袋内A遺跡〈18〉は、2002年に発掘調査が行なわれ、縄文時代前期の黒浜式期の竪穴住居跡4軒、古墳時代後期の竪穴住居跡1軒、奈良時代の竪穴住居跡1軒と掘立柱



第2図 上谷田遺跡周辺遺跡分布図（国土地理院25,000分の1「石下」）

建物跡2棟が確認されている⁶⁾。また鴻野山地区でも布目瓦や軒平瓦が出土した塚前貝塚〈49〉や鴻野山貝塚〈51〉があり、寺院跡の存在も推測されている⁷⁾。

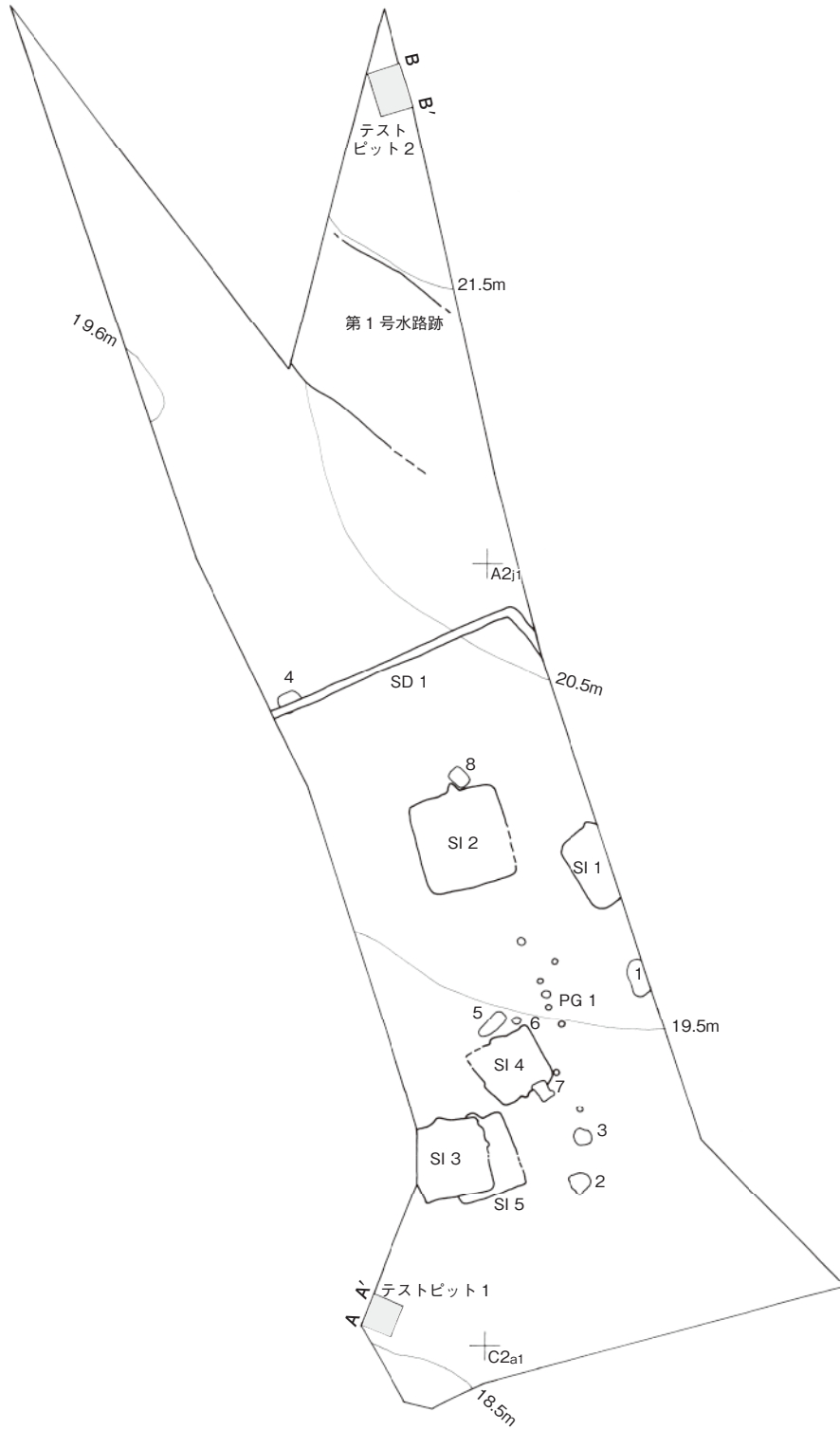
※文中の〈 〉内の番号は、表1及び第2図の該当番号と同じである。

註

- 1) 茨城県教育庁文化課『茨城県遺跡地図（地名表編・地図編）』茨城県教育委員会 2001年3月
- 2) 大森信英ほか『石下町史』石下町史編さん委員会 1988年3月
- 3) 川井正一ほか『国生本屋敷遺跡発掘調査報告書』『石下町史資料』第2集 石下町史編さん室 1987年3月
- 4) 阿部義平編『茨城県国生本屋敷遺跡発掘調査報告』『国立歴史民俗博物館研究報告』第129集 国立歴史民俗博物館 2006年3月
- 5) 註2に同じ
- 6) 早川麗司「袋内A遺跡 一般県道高崎岩井線バイパス事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第220集 2004年3月
- 7) 註2に同じ

表1 上谷田遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代						番号	遺跡名	時代							
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中世			近世	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中世	近世
①	上谷田遺跡		○			○		○	30	塩田窪遺跡					○		
2	弁才天遺跡		○			○			31	門畑遺跡				○			
3	入田遺跡					○			32	地蔵前遺跡		○		○			
4	日枝前遺跡							○	33	峯道遺跡					○		
5	杉山前遺跡					○			34	川戸遺跡		○		○			○
6	登戸古墳群					○			35	堂前遺跡		○		○		○	○
7	宿遺跡		○			○			36	新堀遺跡		○			○		
8	登戸前遺跡						○		37	神子女古墳群				○			
9	宿前遺跡					○			38	六所塚古墳				○			
10	東浦遺跡		○			○	○		39	坊山遺跡		○		○			
11	屋敷遺跡		○			○			40	山中貝塚		○		○			
12	堂ノ前遺跡		○			○			41	淵内遺跡		○					
13	一盃館遺跡		○			○			42	宮内遺跡		○		○			
14	御殿前遺跡		○			○			43	四ツ木遺跡		○		○			○
15	西館遺跡		○			○			44	古間木遺跡		○					
16	新畑遺跡						○		45	松山向遺跡				○			
17	美濃輪山遺跡						○		46	山王A遺跡							○
18	袋内A遺跡		○			○	○		47	入遺跡		○		○			
19	原山遺跡						○		48	五輪前遺跡					○		
20	袋内B遺跡		○			○			49	塚前貝塚					○		
21	元歩遺跡		○			○			50	剣之峯遺跡					○		
22	清水遺跡					○	○		51	鴻野山貝塚		○					
23	西原遺跡					○			52	保持山遺跡		○		○	○		
24	新六遺跡						○		53	前原古墳					○		
25	浦山B遺跡		○			○			54	伊勢宮遺跡					○		
26	浦山A遺跡		○			○			55	坊山B遺跡		○		○			
27	石塔遺跡						○		56	坊山A遺跡					○		
28	大高山遺跡		○			○			57	北原遺跡		○		○			
29	浦山遺跡		○			○			58	国生本屋敷遺跡		○	○	○	○		



第3図 上谷田遺跡遺構全体図

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要

上谷田遺跡は、鬼怒川右岸の標高18～22mの台地縁辺部に位置している。調査前の現況は山林及び畑地で、調査面積は1,411㎡である。

今回の調査によって、奈良・平安時代の竪穴住居跡5軒、土坑2基、近世の水路跡1条、土坑2基、溝跡1条、時期不明の土坑4基、ピット群1か所が確認された。

遺物は、遺物収納コンテナ(60×40×20cm)で7箱出土している。主な遺物は、縄文時代では縄文土器片(深鉢)、奈良・平安時代では土師器(坏、甕、甑)、須恵器(坏、蓋、瓶、甕)、近世では土師質土器(皿)、陶器(碗、皿、甕、播鉢)、磁器(碗)などである。

第2節 基本層序

調査区の北端部(A1c9区)及び南端部(B1j9区)にテストピットを設定し、基本土層の観察を行った(第4図)。調査区は北部で高く、南部及び北西部に向かって緩やかに傾斜しており、北部と南部の比高差は約3mである。

第1層は、暗褐色を呈する現耕作土で、粘性は普通、締まりは弱い。層厚は25～55cmである。

第2層は、黒褐色を呈する土で、第1層よりロームブロックを少量含み、また焼土粒子・炭化粒子も微量含んでいる。粘性・締まりとも普通である。層厚は30～40cmである。

第3層は、褐色のソフトローム層で、粘性・締まりともに普通である。層厚は30～40cmである。

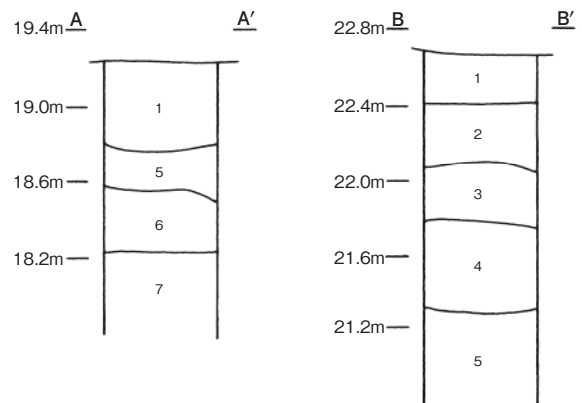
第4層は、暗褐色のハードローム層で、粘性・締まりとも普通である。層厚は30～50cmである。第二黒色帯(BBⅡ)に相当する。

第5層は、褐色のハードローム層で、粘性・締まりとも強い。層厚は20～40cmである。

第6層は、褐色のハードローム層で、第5層に比べてやや暗色を帯びている。強い粘性をもち、締まりも強い。層厚は20～40cmである。

第7層は、灰褐色の粘土層で、常総粘土層に相当するものと考えられる。層厚は下層が未掘のため不明である。

遺構は現耕作土下のローム層上面で確認できた。



第4図 上谷田遺跡基本土層図

第3節 遺構と遺物

1 奈良・平安時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、竪穴住居跡5軒と、土坑2基が確認されている。以下、確認した遺構と遺物について記述する。

(1) 竪穴住居跡

第1号住居跡（第5・6図）

位置 調査区中央部のB2d2区で、標高20mの台地緩斜面部に位置している。

規模と形状 東半部が調査区域外のため、南北軸は4.38mで、東西軸は2.60mしか確認できなかった。形状から主軸方向がN-32°-Wの隅丸方形と推測できる。壁高は25～35cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほほ平坦で、南側に向かって若干傾斜している。壁際を除いて、硬化面が認められる。竈を除いた北壁下と西壁下に壁溝が巡っている。コーナー部分は5～10cmほど深く掘り込まれ、ロームブロックを多量に含む土を埋め戻して床を構築している。

竈 北壁のほぼ中央に付設されていると見られる。規模は焚き口部から煙道部まで140cm、燃烧部幅は40cmである。煙道部は壁外へ逆U字状に40cmほど掘り込まれ、火床面から外傾して立ち上がっている。袖部は床面と同じ高さの地山の上に、砂質粘土粒子を多量に含む暗褐色土で構築している。また、両袖部の補強材として、土師器甕1点がそれぞれ使用されている。火床部は床面を約20cm掘り込み、砂質粘土とローム粒子を含む暗褐色土を埋め戻している。火床面は第4層上面で赤変硬化している。

竈土層解説

1 暗褐色	ロームブロック・炭化物・焼土粒子・砂質粘土粒子少量	5 暗褐色	砂質粘土粒子中量、ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量
2 暗赤褐色	炭化粒子・砂質粘土粒子中量、焼土ブロック・ローム粒子少量	6 にぶい赤褐色	ローム粒子・焼土粒子・砂質粘土粒子中量、炭化粒子少量
3 暗褐色	焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子少量	7 褐色	ロームブロック中量
4 暗赤褐色	焼土ブロック中量、炭化粒子・砂質粘土粒子少量、ローム粒子微量	8 暗褐色	ローム粒子多量、焼土粒子中量、砂質粘土粒子少量、炭化粒子微量

ピット 3か所。P1は深さ26cm、P2は深さ32cmで、いずれも支柱穴と考えられる。南壁際中央部のP3は深さ10cmで、竈と向かい合う位置にあることから出入口施設に伴うピットとみられる。

覆土 7層に分層できる。ロームブロックを含んでいるが、レンズ状の堆積状況から自然堆積である。第7層は壁溝の覆土、第8層は掘方への埋土である。

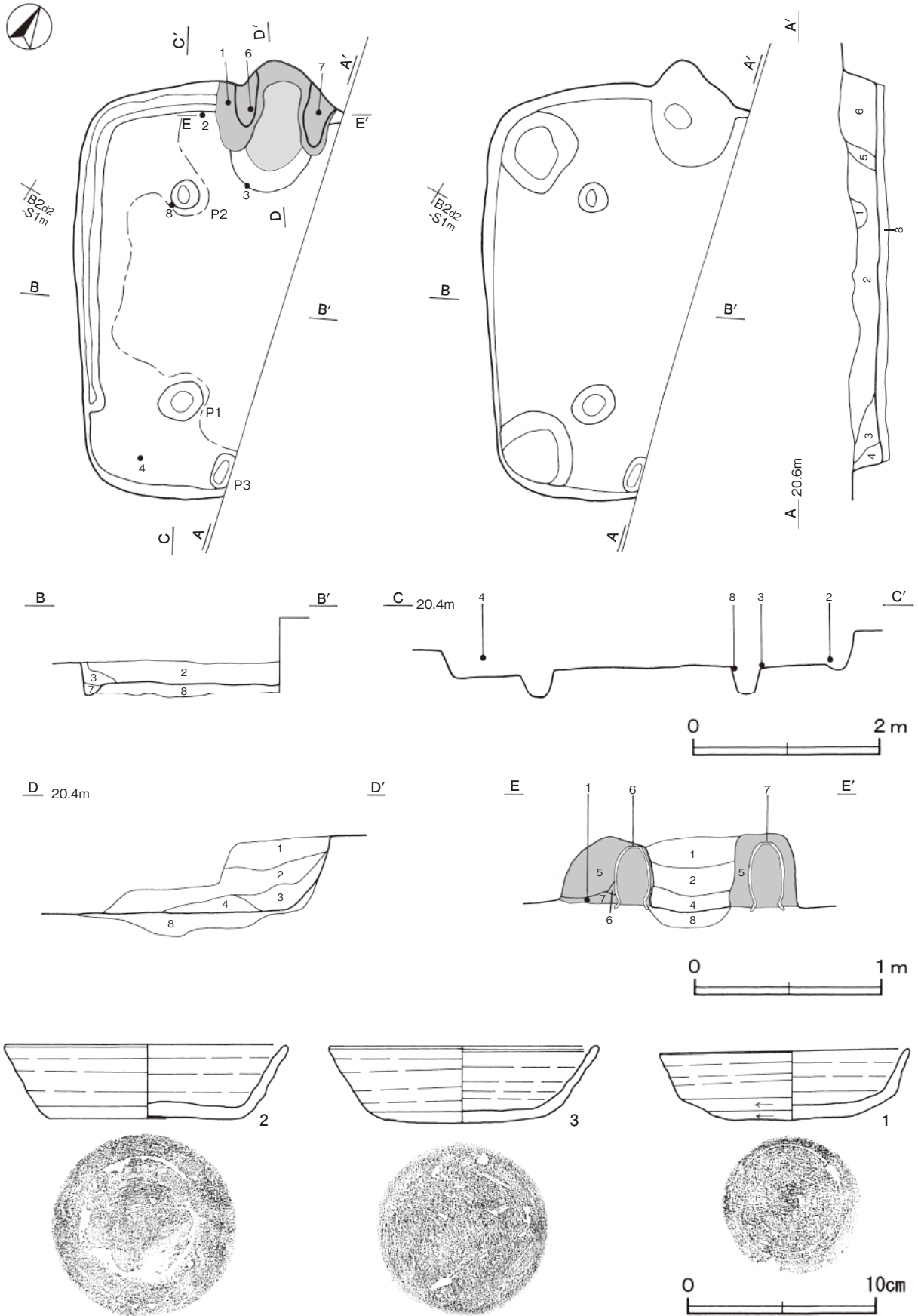
土層解説

1 暗褐色	砂質粘土粒子中量、ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量	6 暗赤褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子少量
2 黒褐色	ロームブロック・炭化粒子中量、焼土粒子微量	7 黒褐色	ローム粒子・砂質粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
3 暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量	8 褐色	ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子微量
4 暗褐色	ロームブロック中量		
5 暗褐色	砂質粘土粒子中量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量、炭化物微量		

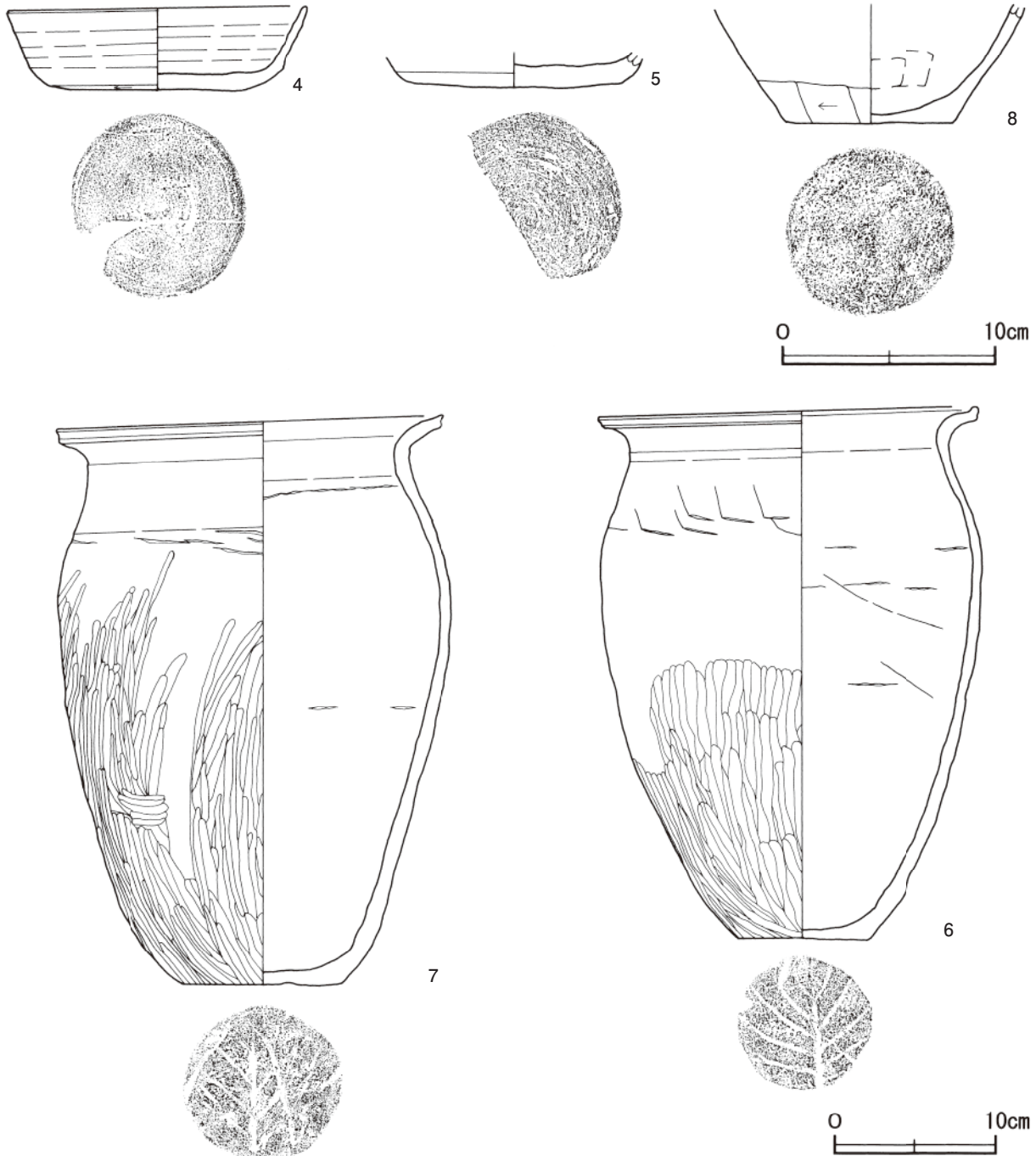
遺物出土状況 土師器片37点（甕）、須恵器片5点（坏）のほか、流れ込んだ縄文土器片1点が出土している。

1は竈左袖部下層から、6は竈左袖部の地山面から、7は竈右袖部の地山面からそれぞれ逆位で出土している。2は北西コーナー付近の覆土下層、3は竈前面の床面、4は南西コーナー部の覆土中層、8は北西コーナー部の床面からそれぞれ出土している。5は覆土中から出土している。

所見 時期は，出土土器から8世紀前葉に比定できる。



第5図 第1号住居跡・出土遺物実測図



第6図 第1号住居跡出土遺物実測図

第1号住居跡出土遺物観察表 (第5・6図)

	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴など	出土位置	備考
1	須恵器	坏	13.2	3.8	6.8	長石・石英	にぶい・橙	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	竈左袖部	100% PL7
2	須恵器	坏	14.8	3.9	10.0	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい・黄橙	普通	体部下端磨れ 底部回転ヘラ切り痕を残す 手持ちヘラ削り	覆土下層	95% PL7
3	須恵器	坏	14.2	4.1	8.8	長石・石英	灰黄	良好	体部下端磨れ 底部手持ちヘラ削り 口縁部内面に沈線	床面	95% PL7
4	須恵器	坏	14.0	4.0	8.0	長石・石英	灰黄	良好	体部下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	覆土中層	90% PL7
5	須恵器	坏	-	(1.7)	10.0	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい・黄橙	普通	体部下端磨れ 底部回転ヘラ削り	覆土中	30%
6	土師器	甕	23.8	33.4	8.2	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部ナデ 下半縦位のヘラ磨き 内面ヘラナデ 底部木葉痕	竈左袖部	100% PL7
7	土師器	甕	24.2	35.9	10.0	長石・石英・雲母	橙	普通	体部ナデ 下半縦位のヘラ磨き 内面ヘラナデ 底部木葉痕	竈右袖部	100% PL7
8	土師器	甕	-	(5.6)	8.0	長石・石英	にぶい・橙	普通	体部ナデ 下端横位のヘラ削り 内面ヘラナデ 底部ヘラ削り	床面	10% PL8

第2号住居跡（第7～9図）

位置 調査区中央部のB1c0区で、標高20mの台地緩斜面部に位置している。

規模と形状 長軸5.32m、短軸5.18mの方形で、主軸方向はN-13°-Wである。壁高は40～60cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほほ平坦で、壁際を除いて硬化面が認められる。竈部分を除いて、壁溝が認められる。コーナー部分は10～15cmほど深く掘り込まれ、白色粘土ブロックを多量に含む土を埋め戻して床を構築している。

竈 北壁のほほ中央に付設されている。規模は焚き口部から煙道部まで165cm、燃焼部幅は60cmである。煙道部は壁外へ逆U字状に66cmほど掘り込まれ、火床面から外傾して立ち上がっている。袖部は床面と同じ高さの地山の上に、白色粘土と砂質粘土粒子を多量に含む褐色土で構築している。火床部は床面を約10cm掘り込み、ローム粒子を含む褐色土を埋め戻している。火床面は赤変硬化している。

竈土層解説

1	暗褐色	ロームブロック・焼土粒子少量、砂質粘土粒子微量	9	暗赤褐色	焼土ブロック・砂質粘土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子少量、砂粒微量
2	暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・砂質粘土粒子中量、炭化粒子微量	10	暗褐色	ロームブロック・砂質粘土粒子中量、白色粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
3	暗褐色	砂質粘土粒子中量、ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量	11	褐色	ローム粒子・砂質粘土粒子中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量
4	極暗褐色	焼土粒子中量、ローム粒子・砂質粘土粒子少量、炭化粒子微量	12	暗赤褐色	焼土粒子・炭化粒子中量、ローム粒子・砂質粘土粒子少量
5	にぶい赤褐色	砂質粘土粒子中量、焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量	13	褐色	砂質粘土粒子多量、白色粘土ブロック・ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量
6	暗赤褐色	焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子少量	14	褐色	ローム粒子中量、白色粘土ブロック・砂質粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
7	褐色	ロームブロック・炭化粒子中量、砂質粘土粒子少量、焼土粒子微量	15	にぶい黄褐色	白色粘土ブロック多量、ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量
8	暗赤褐色	焼土ブロック中量、炭化物・砂質粘土粒子少量、ローム粒子微量	16	褐色	ローム粒子中量、炭化粒子少量、焼土粒子微量

ピット 6か所。各コーナー寄りに位置しているP1～P4は、深さ43～62cmで規模と位置から主柱穴である。南壁下の中央部に位置しているP5は深さ31cm、P6は深さ7cmで、竈と向かい合う位置にあることから出入口施設に伴うピットとみられる。

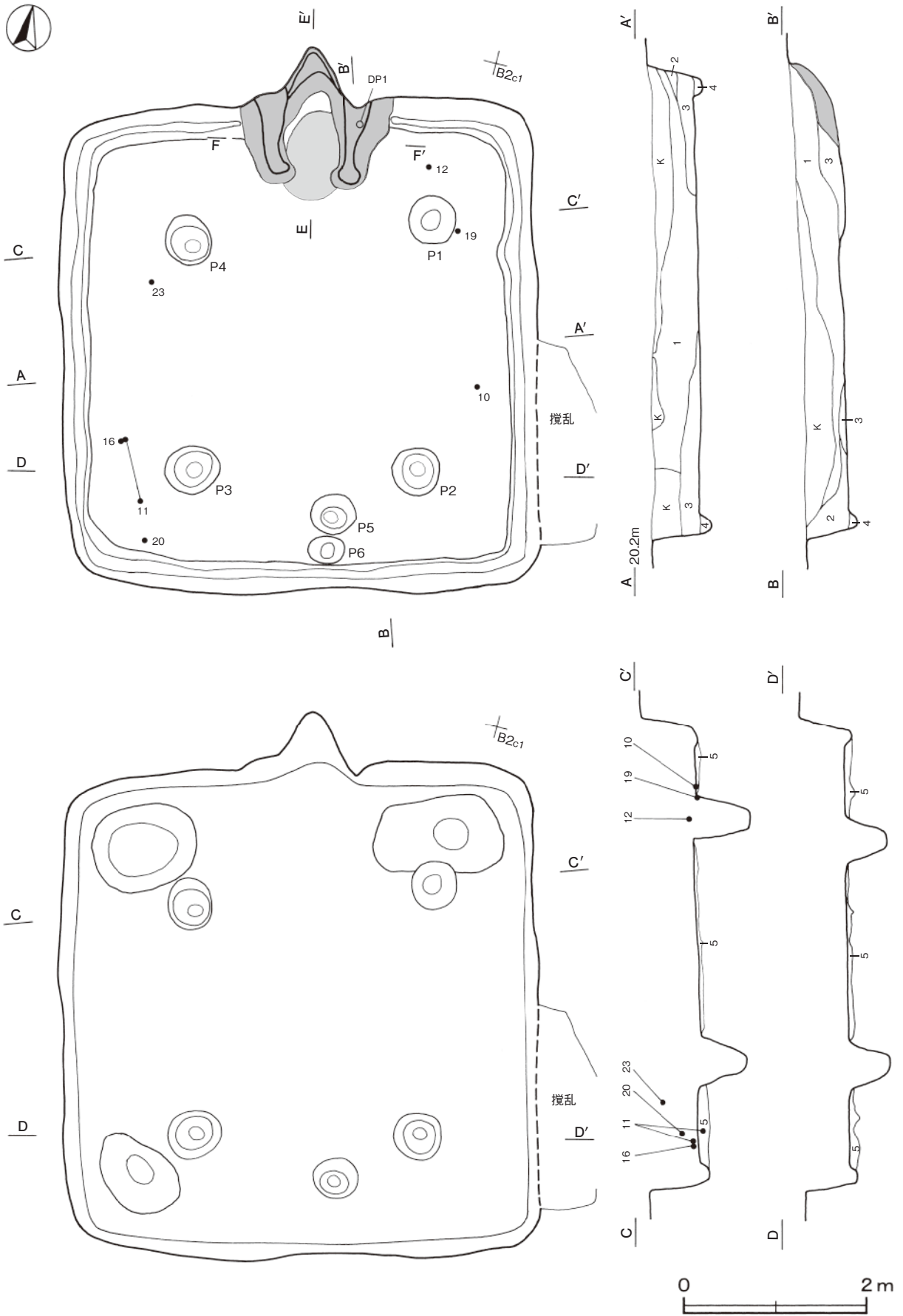
覆土 4層に分層できる。ロームブロックを含んでいるが、レンズ状の堆積状況から自然堆積である。第4層は壁溝の覆土、第5層は掘方への埋土である。

土層解説

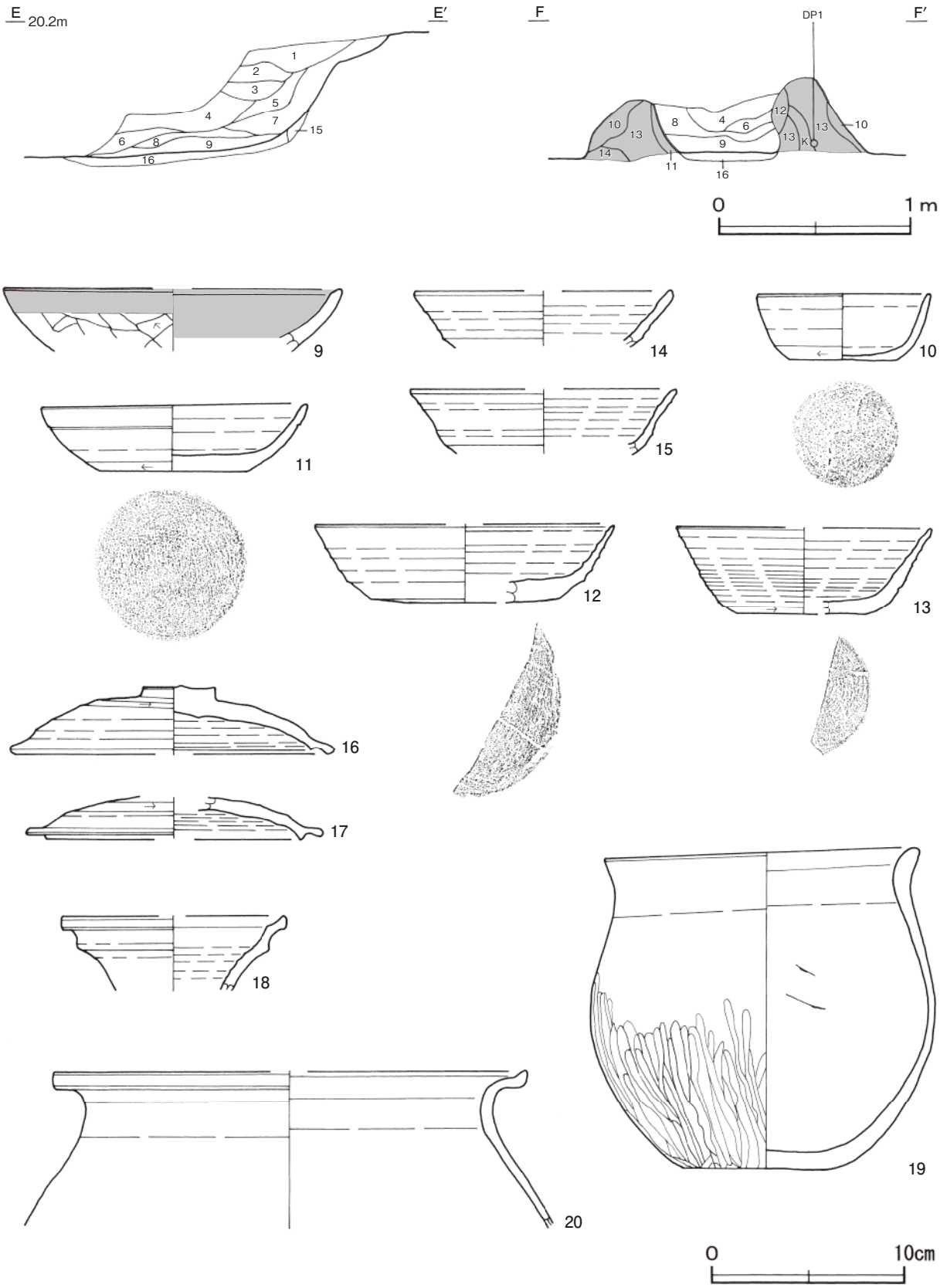
1	極暗褐色	焼土ブロック・ローム粒子少量、白色粘土ブロック・炭化粒子微量	4	暗褐色	ローム粒子中量、白色粘土ブロック・焼土粒子少量、炭化物微量
2	黒褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	5	暗褐色	白色粘土ブロック多量、炭化粒子微量
3	暗褐色	白色粘土ブロック中量、ローム粒子少量、焼土粒子微量			

遺物出土状況 土師器片327点（坏63、甕262、甗2）、須恵器片42点（坏22、蓋7、壺5、瓶1、甕7）、土製品1点（支脚）、不明鉄製品1点、鉄滓1点のほか、流れ込んだ縄文土器片7点、剥片1点（黒曜石）、石器1点（磨石）、混入した陶器片1点（碗）、磁器片2点（碗、皿）、瓦片1点が出土している。10は東壁中央付近の床面、12・19は北東コーナー部の床面、11・16は南西コーナー部の床面、20は南西コーナーの覆土下層、23は北西コーナー付近の覆土中層から、それぞれ出土している。9・13～15・17・18・21・22は覆土上層、24は覆土下層からそれぞれ出土している。DP1は竈右袖部内から出土している。

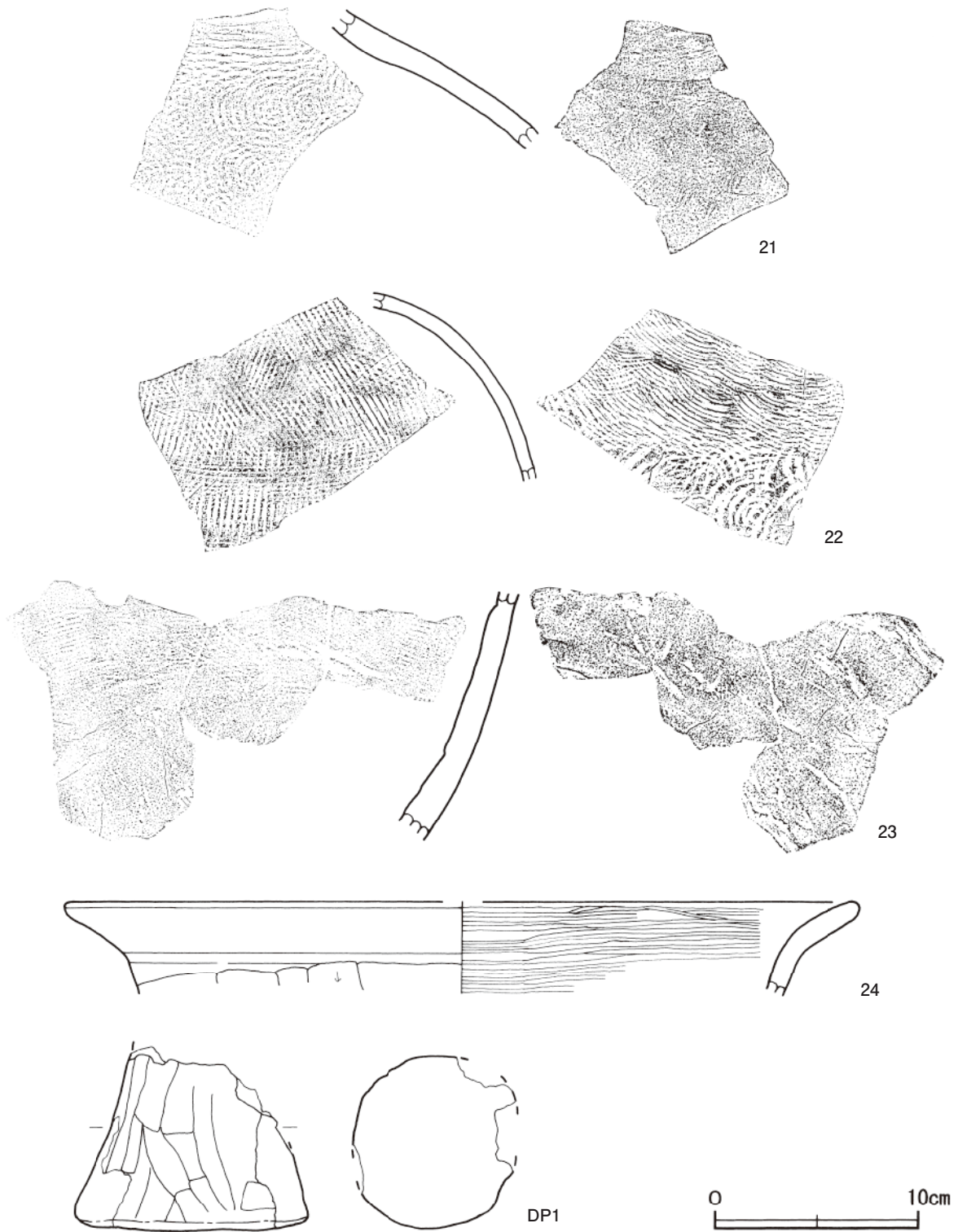
所見 時期は、出土土器から8世紀前葉に比定できる。DP1は支脚として使用された後、竈袖部の芯材として再利用されたものと推測できる。



第7图 第2号住居迹实测图



第8図 第2号住居跡・出土遺物実測図



第9図 第2号住居跡出土遺物実測図

第2号住居跡出土遺物観察表 (第8・9図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴など	出土位置	備考
9	土師器	坏	[17.2]	(3.2)	-	長石・石英	橙	普通	体部横位のヘラ削り 内面ナデ 口縁部外面・内面黒色処理	覆土上層	10%
10	須恵器	小形坏	9.0	3.4	5.6	長石・石英	灰白	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	床面	95% PL7
11	須恵器	坏	13.6	3.5	7.6	長石・石英	灰白	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り 口縁部外面に沈線	床面	100% PL7

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴など	出土位置	備考
12	須恵器	坏	[15.4]	4.0	[9.8]	長石・石英・雲母	浅黄	普通	体部下端無調整 底部回転ヘラ切り痕を残す手持ちヘラ削り 口縁部内面に沈線	床面	30% PL7
13	須恵器	坏	[13.0]	4.5	[6.8]	長石・石英	灰	良好	体部下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	覆土上層	20% PL8
14	須恵器	坏	[13.2]	(2.9)	-	長石・石英	にぶい黄	普通	ロクロナデ	覆土上層	10%
15	須恵器	坏	[13.6]	(3.4)	-	長石・石英・雲母	灰黄	良好	体部下端磨れ	覆土上層	10%
16	須恵器	蓋	[16.2]	3.6	-	長石・石英・雲母	灰白	良好	天井部回転ヘラ削り後つまみ貼り付け	床面	60% PL7
17	須恵器	蓋	[15.4]	(2.2)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	天井部回転ヘラ削り	覆土上層	60%
18	須恵器	長頸瓶	[11.4]	(3.9)	-	長石	外面黄褐胎土淡黄	良好	ロクロナデ	覆土上層	10% PL7
19	土師器	甕	16.2	16.6	8.6	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	体部ナデ 下半縦位のヘラ磨き 内面ヘラナデ 底部ヘラ磨き	床面	80% PL8
20	土師器	甕	[24.4]	(8.1)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	体部ナデ 内面ヘラナデ	覆土下層	10% PL8
21	須恵器	甕	-	(6.9)	-	長石・石英	浅黄	良好	外面同心円の叩き 内面ヘラナデ	覆土上層	5%
22	須恵器	甕	-	(9.2)	-	長石・石英	外面黒胎土にぶい褐	良好	外面斜位の平行叩き 内面同心円文の当具痕 体部上位にカキ目状沈線	覆土上層	5%
23	須恵器	甕	-	(12.1)	-	長石・石英・雲母	灰黄	良好	外面横位の平行叩き 下端横位のヘラ削り 内面ヘラナデ	覆土中層	5%
24	土師器	甗	[38.0]	(4.5)	-	長石・石英	橙	普通	体部縦位のヘラ削り 内面横位のヘラ磨き	覆土下層	5%

番号	器種	高さ	最大径	最小径	重量	材質	特徴など	出土位置	備考
DP 1	支脚	(9.0)	11.3	-	(633.0)	土(長石・石英)	上部欠損 ヘラ削り	甕右袖部	PL8

第3号住居跡 (第10~12図)

位置 調査区南部のB 1 h0区で、標高19mの台地緩斜面部に位置している。

重複関係 第5号住居跡を掘り込んでいる。

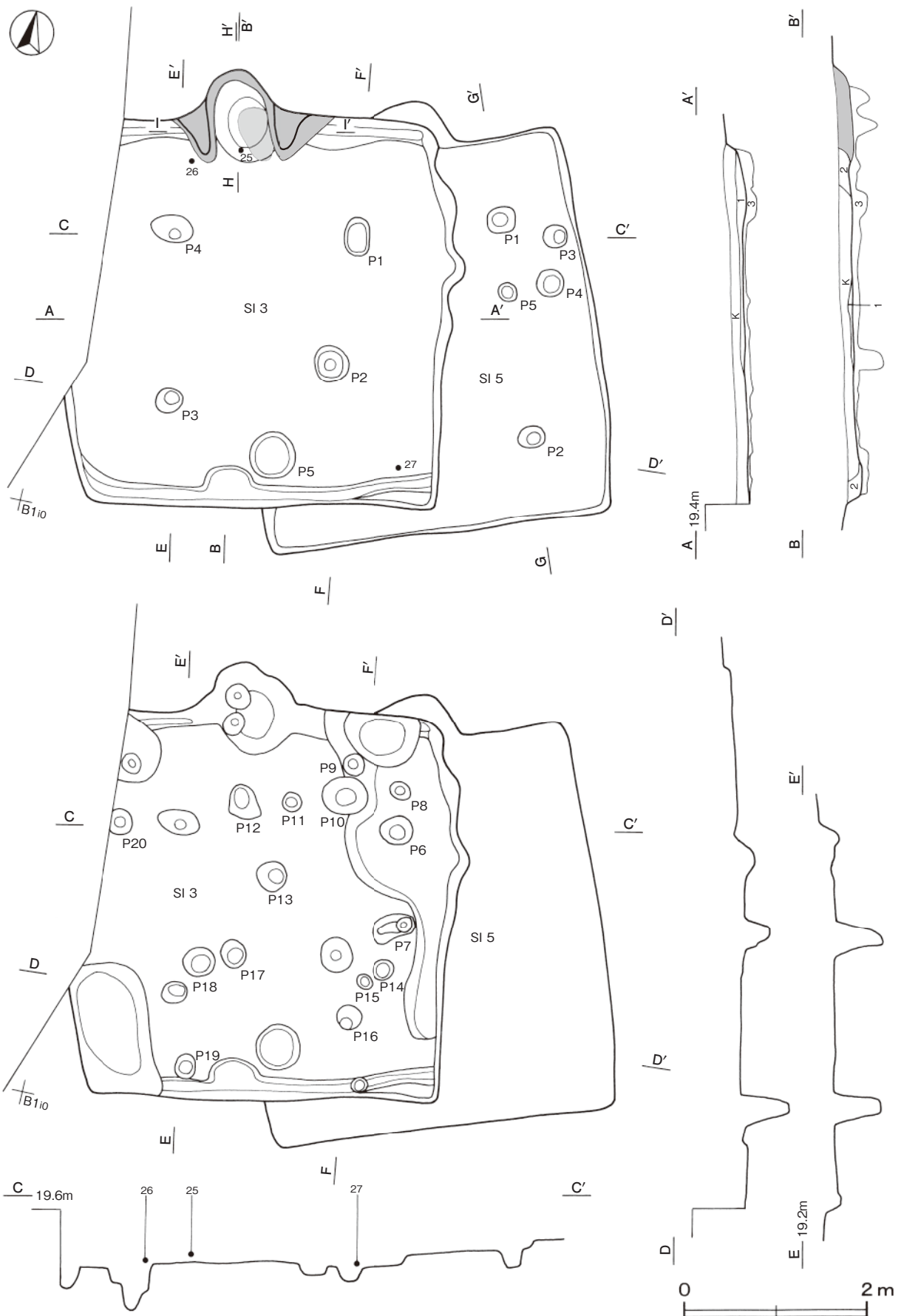
規模と形状 長軸4.16m、短軸4.04mの方形で、主軸方向はN-14°-Wである。壁高は14~24cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほほ平坦で、西側に向かって若干傾斜している。硬化面は認められない。竈部分を除いた北壁と南壁に壁溝が認められる。北西・南西コーナー部分と東壁際は10~15cmほど深く掘り込まれ、白色粘土ブロックを多量に含む土を埋め戻して床を構築している。

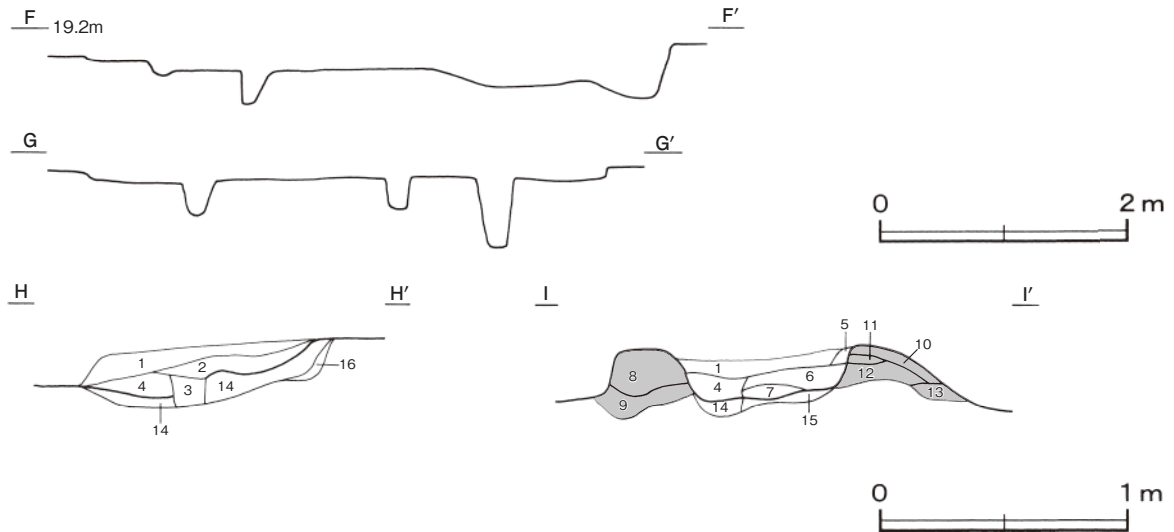
竈 北壁のほほ中央に付設されている。規模は焚き口部から煙道部まで104cm、燃焼部幅は60cmである。煙道部は壁外へ逆U字状に50cmほど掘り込まれ、火床面から外傾して立ち上がっている。袖部は地山を掘り残して基部とし、白色粘土を多量に含む暗褐色土で構築している。火床部は床面を約12cm掘り込み、ローム粒子を含む褐色土を埋め戻している。火床面は赤変硬化している。

竈土層解説

1	褐色	ローム粒子・焼土粒子中量、炭化粒子微量	9	暗褐色	粘土ブロック少量、焼土粒子微量
2	黒褐色	焼土ブロック多量、炭化粒子微量	10	暗褐色	砂粒多量、粘土粒子中量、焼土粒子微量
3	暗褐色	ローム粒子・粘土粒子多量、焼土ブロック中量、炭化粒子微量	11	暗褐色	焼土ブロック多量、粘土ブロック少量
4	暗褐色	焼土粒子・砂粒多量、粘土ブロック・ローム粒子少量	12	褐色	粘土粒子多量、焼土粒子少量、粘土ブロック・炭化粒子微量
5	暗褐色	砂粒多量、焼土粒子・粘土粒子微量	13	暗褐色	焼土粒子中量、粘土ブロック少量、炭化粒子微量
6	暗赤褐色	焼土ブロック多量、炭化粒子・粘土粒子・砂粒微量	14	暗褐色	粘土ブロック中量、焼土ブロック少量
7	暗赤褐色	焼土ブロック多量	15	暗褐色	ローム粒子多量
8	暗褐色	砂粒多量、粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	16	褐色	ローム粒子多量



第10图 第3・5号住居跡実測図(1)



第11図 第3・5号住居跡実測図(2)

ピット 20か所。各コーナー寄りに位置しているP 1～P 4は、深さ14～49cmで規模と位置から主柱穴である。南壁下の中央部に位置しているP 5は深さ19cmで、竈と向かい合う位置にあることから出入口施設に伴うピットとみられる。P 6～P 20は掘方の調査時に確認されたものである。深さは10～26cmで、性格等は不明である。

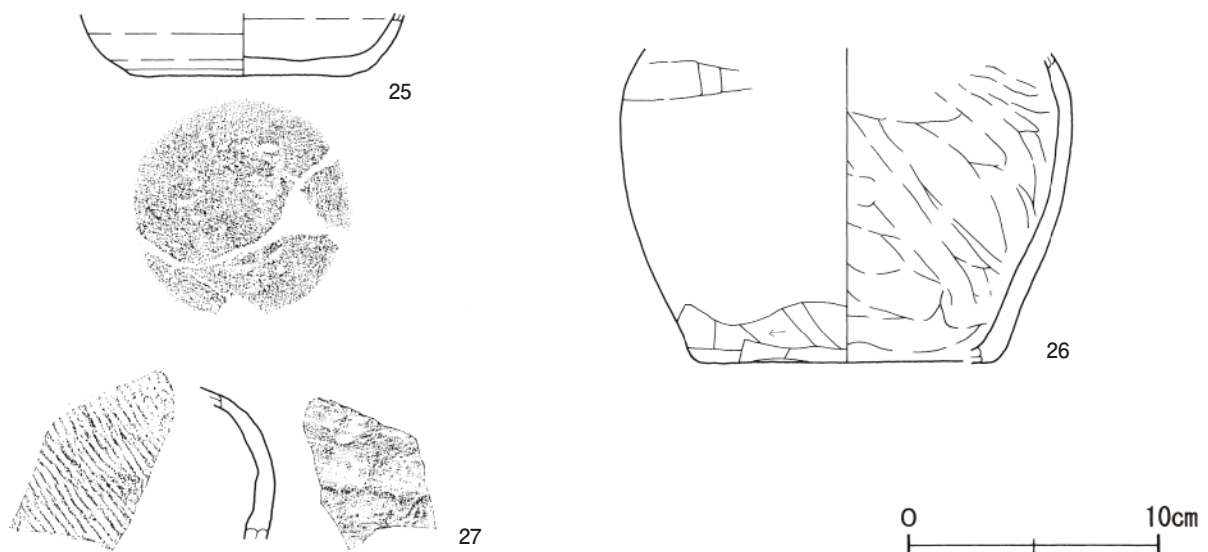
覆土 2層に分層できる。焼土粒子や炭化粒子を若干含んでいるが、レンズ状の堆積状況から自然堆積である。第3層は掘方への埋土である。

土層解説

- 1 極暗褐色 焼土粒子・粘土粒子少量, 炭化粒子微量
- 2 暗褐色 焼土ブロック・粘土ブロック少量, 炭化粒子微量
- 3 暗褐色 白色粘土ブロック多量, 焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片62点(坏4, 甕57, 手づくね1), 須恵器片21点(坏14, 甕7)のほか、流れ込んだ縄文土器片2点, 焼成粘土塊7点, 混入した陶器片1点(碗), 土師質土器片1点(皿)が出土している。25は竈燃焼部, 26は竈西側の床面, 27は南東コーナー部の床面から、それぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から8世紀前葉に比定できる。



第12図 第3号住居跡出土遺物実測図

第3号住居跡出土遺物観察表（第12図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴など	出土位置	備考
25	須恵器	坏	-	(2.5)	8.6	長石・石英	灰白	普通	体部下端磨れ 底部回転ヘラ削り	竈燃焼部	50% PL8
26	須恵器	甕	-	(12.5)	[11.8]	長石・石英・雲母	灰	良好	体部ナデ 下端横位のヘラ削り 内面斜位のヘラナデ	床面	20% PL8
27	須恵器	甕	-	(6.0)	-	長石・石英	外面灰胎土にふい縄	良好	外面斜位の平行叩き 内面無文の当具痕	床面	5%

第4号住居跡（第13・14図）

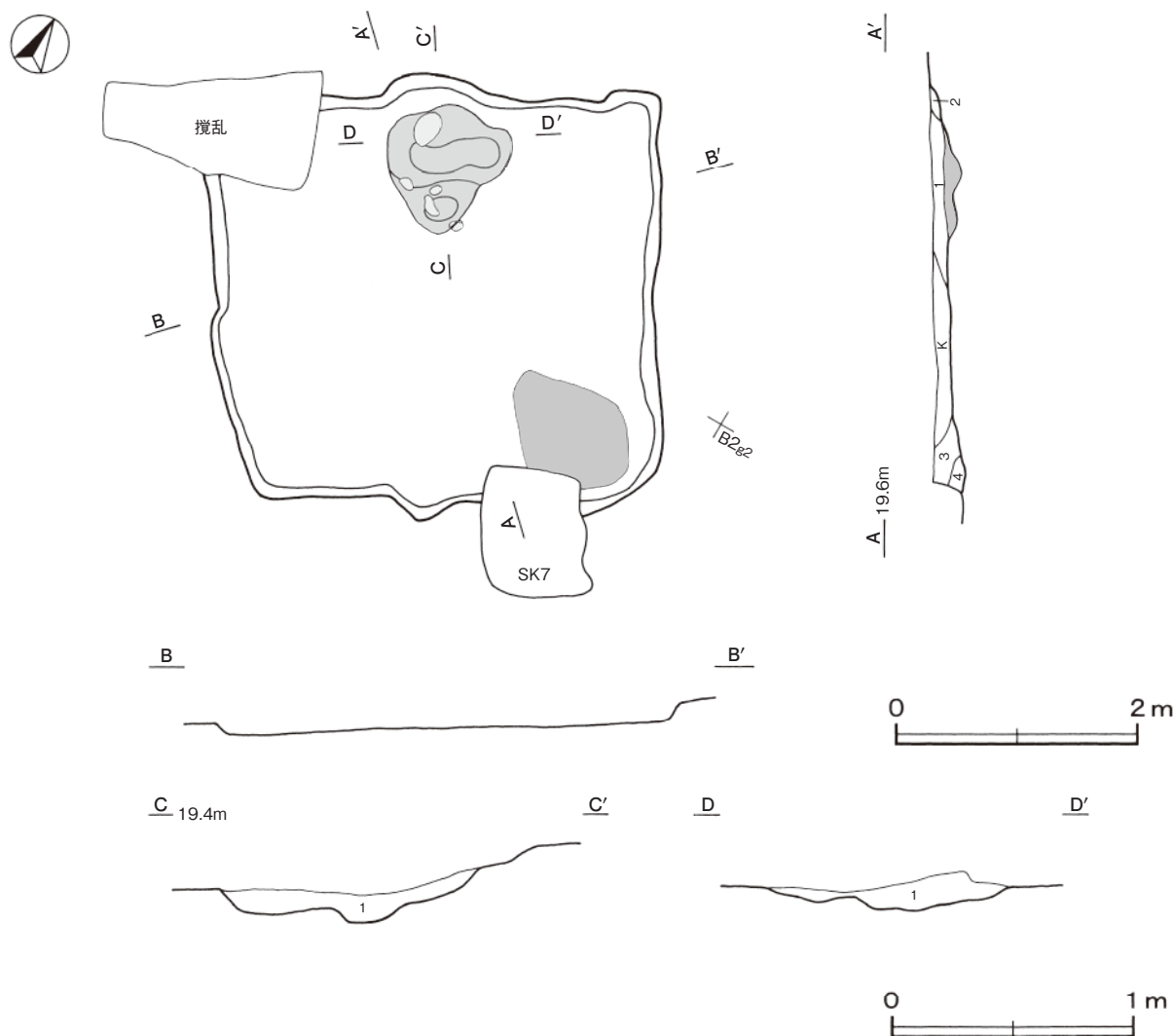
位置 調査区南部のB2fl区で、標高19mの台地緩斜面部に位置している。

重複関係 第7号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.70m，短軸3.40mの方形で，主軸方向はN-33°-Wである。壁高は14~20cmで，外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦であるが，南壁中央付近が5~10cmほど下がっている。硬化面は認められない。

竈 北壁のほぼ中央に付設されているが，攪乱のため袖部は失われている。煙道部は壁外へ逆U字状に20cmほど掘り込まれ，火床面から緩やかに立ち上がっている。火床部は長径110cm，短径104cmで，床面を10~15cmほど掘り込み，白色粘土を埋め戻している。火床面は赤変硬化している。



第13図 第4号住居跡実測図

竈土層解説

1 暗 褐 色 焼土ブロック・白色粘土ブロック・炭化粒子少量

覆土 4層に分層できる。焼土粒子や炭化粒子を若干含んでいるが、レンズ状の堆積状況から自然堆積である。

土層解説

1 暗 褐 色 焼土ブロック少量, 粘土粒子微量

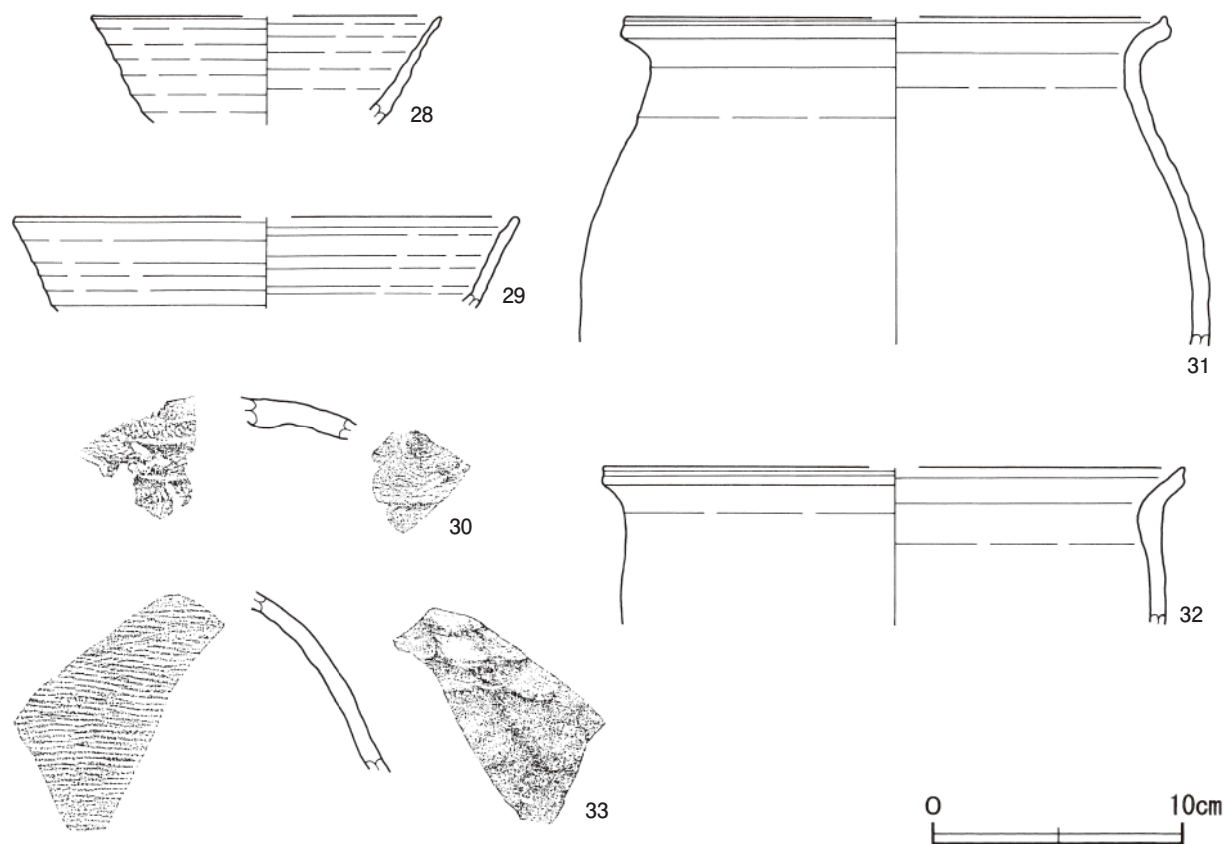
3 極 暗 褐 色 白色粘土ブロック中量, 焼土粒子微量

2 暗 褐 色 焼土粒子・炭化粒子微量

4 黒 褐 色 粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片35点（坏1，甕34），須恵器片19点（坏14，瓶1，甕4）のほか、流れ込んだ縄文土器片5点が出土している。31は火床面と掘方内から出土している。28～30・32・33は覆土上層から出土している。また、床面上の南東コーナー部に白色粘土が径90cm，厚さ3～5cmの範囲で遺存している。

所見 時期は，出土土器から9世紀前葉に比定できる。



第14図 第4号住居跡出土遺物実測図

第4号住居跡出土遺物観察表（第14図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴など	出土位置	備考
28	須恵器	坏	[13.8]	(4.3)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	ロクロナデ	覆土上層	20%
29	須恵器	高台付坏	[20.0]	(3.6)	-	長石・石英	灰	良好	ロクロナデ	覆土上層	10%
30	須恵器	長頸瓶	-	(1.7)	-	長石・石英・雲母	灰白	良好	外面縄目圧痕 内面ロクロナデ	覆土上層	5%
31	土師器	甕	[21.4]	(13.0)	-	長石・石英・雲母	明褐	普通	体部ナデ 内面ヘラナデ	竈火床面・掘方	10%
32	土師器	甕	[23.0]	(6.2)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	体部ナデ 内面ヘラナデ	覆土上層	5%
33	須恵器	甕	-	(7.2)	-	長石・石英	灰	良好	外面横位の平行叩き 内面無文の当具痕	覆土上層	5%

第5号住居跡（第10・11・15図）

位置 調査区南部のB 2 h1区で、標高19mの台地緩斜面部に位置している。

重複関係 第3号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.18m、短軸3.78mの方形で、主軸方向はN-22°-Wである。壁高は5~15cmで、外傾して立ち上がっている。

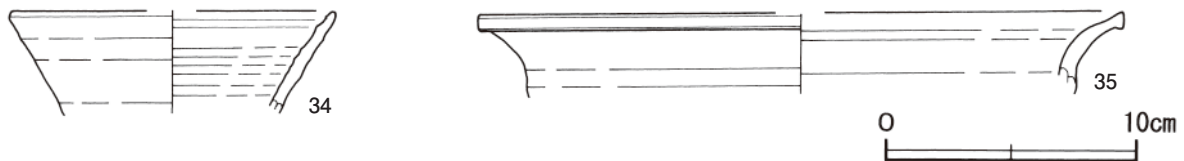
床 ほぼ平坦で、硬化面は認められていない。

竈 北壁のほぼ中央に付設されているが、第3号住居に掘り込まれているため、煙道の一部が確認できたのみである。煙道部は壁外へ逆U字状に50cmほど掘り込んでいる。煙道部の前面には焼土粒子と粘土ブロックを含む暗褐色土が散布しており、袖部の残骸と思われる。

ピット 5か所。北東・南東コーナー寄りのP 1は深さ55cm、P 2は29cmで、位置から支柱穴と見られる。また第3号住居跡のP 13・P 16は深さ50cm・26cmで、位置的に本跡の支柱穴となる可能性が高い。東壁中央付近に位置するP 3~P 5は深さ23~26cmで、性格は不明である。

遺物出土状況 土師器片3点（甕）、須恵器片2点（坏、甕）が出土している。34・35は覆土上層から出土している。

所見 時期は、出土土器から8世紀前葉に比定できる。



第15図 第5号住居跡出土遺物実測図

第5号住居跡出土遺物観察表（第15図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴など	出土位置	備考
34	須恵器	坏	[12.8]	(4.1)	-	長石・石英	灰	良好	ロクロナデ 口縁部内面に沈線	覆土上層	10%
35	須恵器	鉢形甕	[25.6]	(3.2)	-	長石・石英・雲母	灰白	良好	ロクロナデ	覆土上層	5%

表2 奈良・平安時代の竪穴住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模 (m)		壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設				覆土	主な出土遺物	備考 重複関係 (古→新)
				長軸×短軸 (径)	(径)				支柱穴	出入口	ピット	竈			
1	B 2d2	N-32°-W	[隅丸方形]	4.38 × (2.60)	(2.60)	25~35	平坦	北~西壁	2	1	-	北壁中央	自然	土師器, 須恵器	
2	B 1c0	N-13°-W	方形	5.32 × 5.18	5.18	40~60	平坦	全周	4	2	-	北壁中央	自然	土師器, 須恵器, 土製品	
3	B 1h0	N-14°-W	方形	4.16 × 4.04	4.04	14~24	平坦	北・南壁	4	1	15	北壁中央	自然	土師器, 須恵器	SI5 → 本跡
4	B 2f1	N-33°-W	方形	3.70 × 3.40	3.40	14~20	平坦	-	-	-	-	北壁中央	自然	土師器, 須恵器	本跡 → SK7
5	B 2h1	N-22°-W	方形	4.18 × 3.78	3.78	5~15	平坦	-	2	-	3	北壁中央	-	土師器, 須恵器	本跡 → SI3

(2) 土坑

第7号土坑（第16図）

位置 調査区南部のB 2 g1区で、標高19mの台地緩斜面部に位置している。

重複関係 第4号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸1.08m, 短軸0.89mの長方形で, 長軸方向はN-30°-Wである。深さは25cmで, 底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

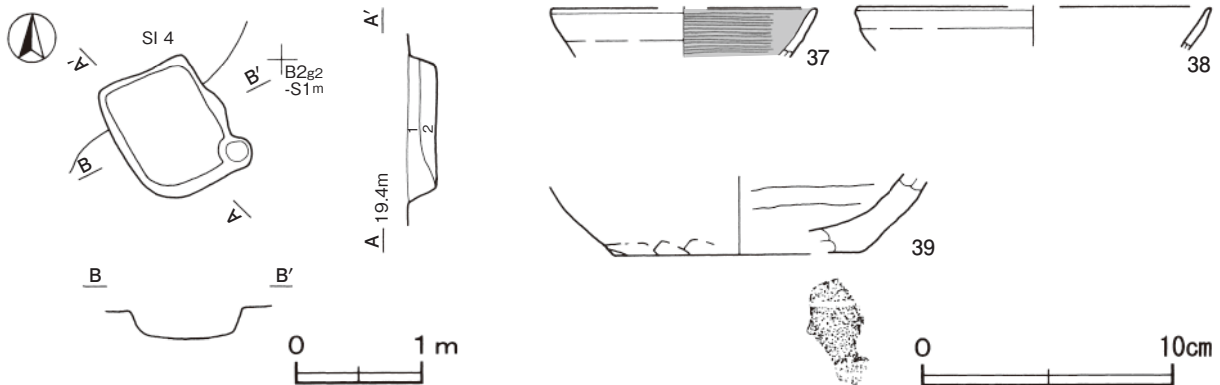
覆土 2層に分層できる。レンズ状の堆積状況から, 自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子・粘土粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片4点(坏1, 甕3), 須恵器片1点(坏)が出土している。37~39は覆土上層から出土している。

所見 時期は, 出土土器から9世紀後葉に比定できる。



第16図 第7号土坑・出土遺物実測図

第7号土坑出土遺物観察表 (第16図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴など	出土位置	備考
37	土師器	坏	[10.4]	(1.9)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄褐色	普通	内面横位のヘラ磨き 内面黒色処理	覆土上層	5%
38	須恵器	坏	[14.0]	(1.7)	-	長石・石英	灰白	普通	ロクロナデ	覆土上層	5%
39	土師器	甕	-	(3.1)	[10.0]	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部下端横位のヘラナデ 内面ヘラナデ 底部木葉痕	覆土上層	5%

第8号土坑 (第17図)

位置 調査区中央部のB1c0区で, 標高20mの台地緩斜面部に位置している。

規模と形状 長軸1.05m, 短軸0.94mの長方形で, 長軸方向はN-45°-Wである。深さは55cmで, 底面は平坦である。壁は直立して立ち上がっている。

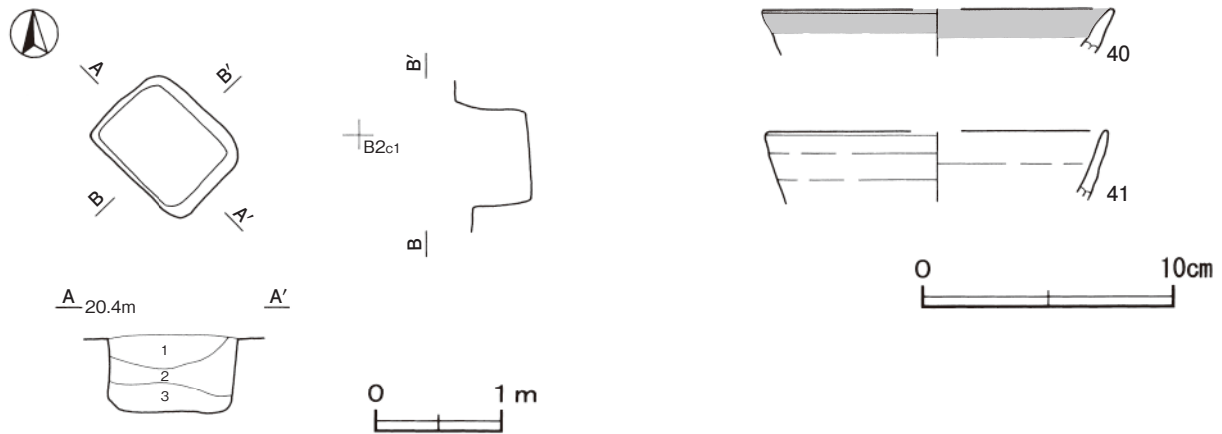
覆土 3層に分層できる。レンズ状の堆積状況から, 自然堆積である。

土層解説

- 1 褐色 粘土ブロック多量, ロームブロック中量
- 2 黒褐色 ロームブロック・粘土ブロック中量, 焼土粒子少量
- 3 極暗褐色 ロームブロック・粘土ブロック少量, 焼土粒子微量

遺物出土状況 土師器片12点(坏1, 甕11), 須恵器片2点(坏)が出土している。40・41は覆土上層から出土している。

所見 時期は, 出土土器から8世紀前葉に比定できる。



第17図 第8号土坑・出土遺物実測図

第8号土坑出土遺物観察表（第17図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴など	出土位置	備考
40	土師器	坏	[14.0]	(1.8)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	体部ヘラナデ 口縁部外・内面黒色処理	覆土上層	5%
41	須恵器	坏	[13.6]	(2.8)	-	長石・石英	黄灰	良好	ロクロナデ	覆土上層	5%

表3 奈良・平安時代の土坑一覧表

番号	位置	長軸方向	平面形	規模 (m)		深さ (cm)	壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係 (古→新)
				長径×短径 (軸) (軸)							
7	B 2g1	N-30°-W	長方形	1.08 × 0.89	25	外傾	平坦	自然	土師器, 須恵器	SI4 → 本跡	
8	B 1c0	N-45°-W	長方形	1.05 × 0.94	55	直立	平坦	自然	土師器, 須恵器		

2 近世の遺構と遺物

当時代の遺構は、水路跡1条、土坑2基、溝跡1条が確認されている。以下、確認した遺構と遺物について記述する。

(1) 水路跡

第1号水路跡（第18図）

位置 調査区北部のA1f8～A2h1区で、標高21mの台地上に位置している。

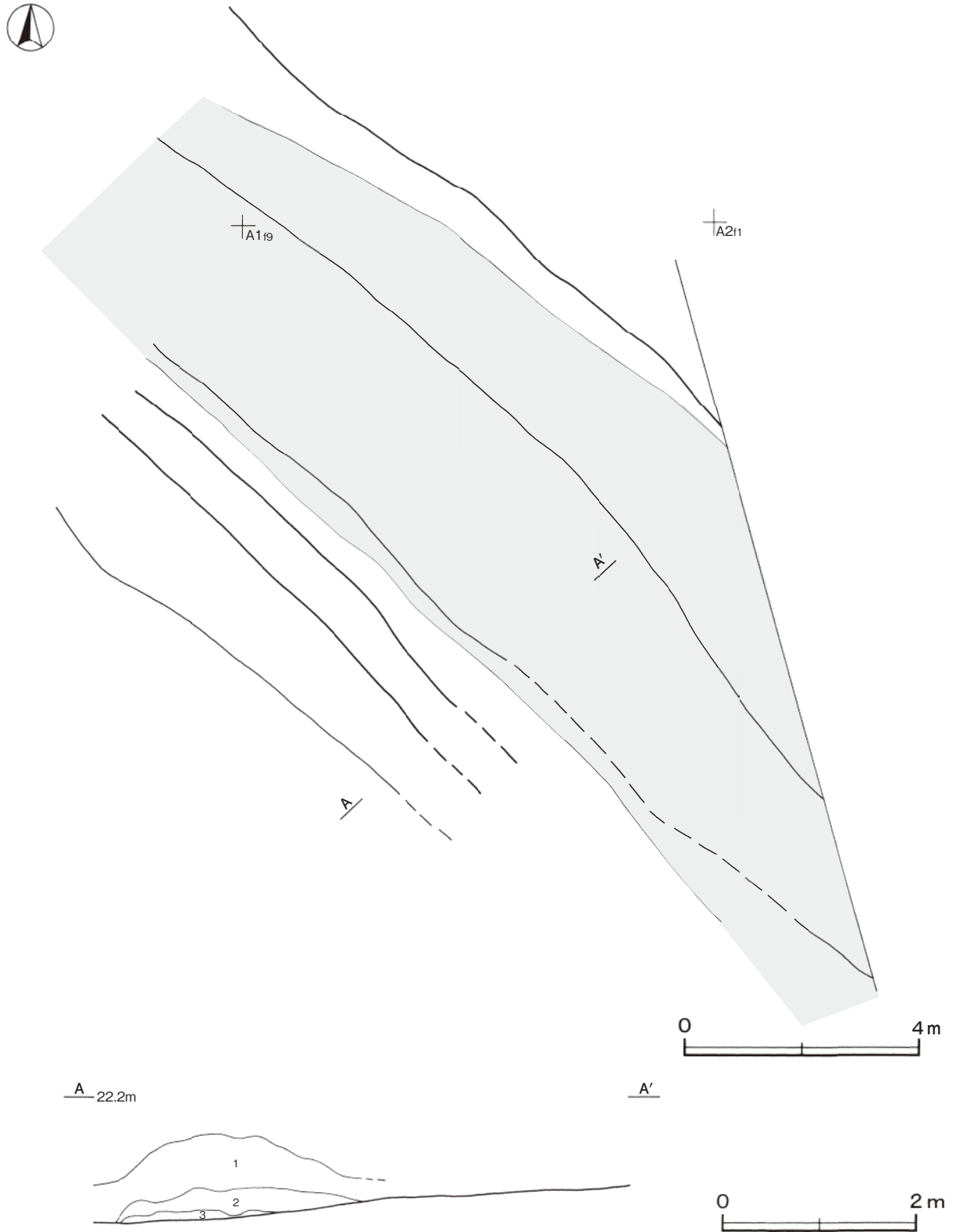
規模と形状 調査区域を横断するように、東西約11m、幅約3.5mの土塁と、上幅5.3mの堀跡が確認できた。堀跡は後世の攪乱が著しく、掘り込みを確認することができなかった。土塁は堀跡の南側に沿って位置しており、地山面からの高さは88cmである。

覆土 土塁は3層に分層できる。第1層は表土と連続的で、第1・2層ともロームブロックを含んでいるが、締まりのない土で、版築状の堆積は認められない。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------|------|---------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 | 3 褐色 | ローム粒子多量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子微量 | | |

所見 土塁は版築等の痕跡が確認されなかったことから、堀掘削時の掘り上げ土と考えられる。時期は遺物がないため不明であるが、調査区域外に延びている土塁と堀跡は、近世享保年間に掘削された吉田用水に連続していることから、本跡も吉田用水の一部と推測される。



第18図 第1号水路跡実測図

(2) 土坑

第1号土坑 (第19図)

位置 調査区中央部のB 2 e3区で、標高19.7mの台地緩斜面部に位置している。

規模と形状 東半部が調査区域外のため、確認できた北西・南東軸は2.14mで、北東・南西軸は0.85mしか確認できなかったが、長軸方向N-32°-Wの隅丸長方形と推測できる。深さは57cmで、底面はやや凹凸がある。壁は北側では直立して、南側では緩やかに立ち上がっている。

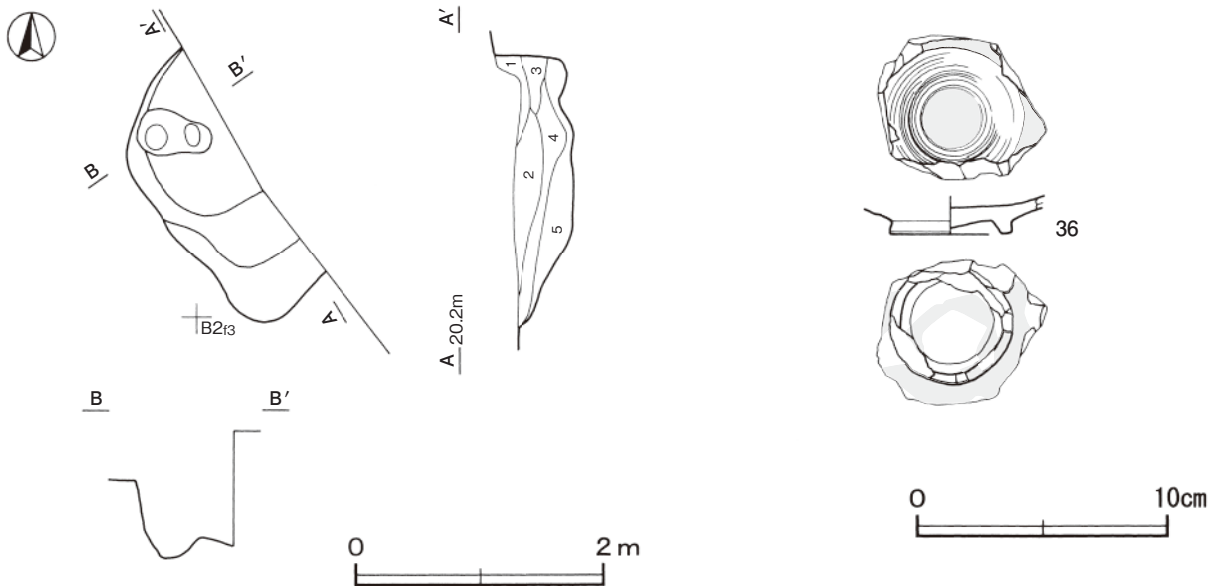
覆土 5層に分層できる。ロームブロックを含んでいるが、レンズ状の堆積状況から自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|--------|------------------------|--------|-------------------|
| 1 極暗褐色 | ロームブロック中量, 炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック多量, 炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量 | 5 極暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック中量, 炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 陶器片1点が出土している。36は覆土中層から出土している。

所見 時期は、出土陶器から17世紀代に比定できる。



第19図 第1号土坑・出土遺物実測図

第1号土坑出土遺物観察表 (第19図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴など	出土位置	備考
36	陶器	皿	-	(1.5)	4.8	緻密	外面釉灰白 内面釉緑灰 胎土にふい褐	良好	底部高台削り出し 外面灰釉を施釉 内面銅緑釉を施釉 内底面釉 拭き取りによる輪禿げ	覆土中層	10%

第4号土坑 (第20図)

位置 調査区中央部のB 1 a8区で、標高20mの台地緩斜面部に位置している。

重複関係 第1号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸1.32mで、確認できた短軸は0.85mの隅丸長方形で、長軸方向はN-63°-Eである。深さは57cmで、底面は平坦である。北・東壁は直立して、西壁は外傾して立ち上がっている。

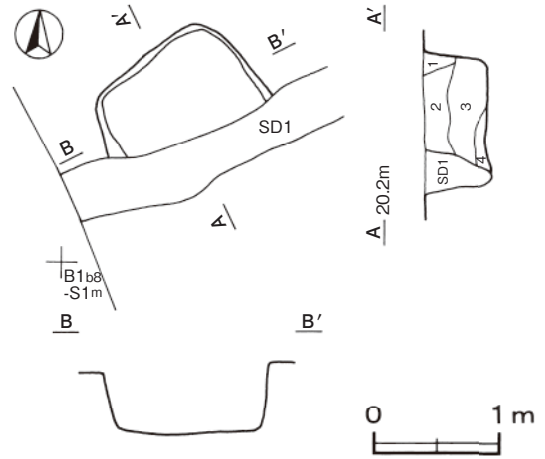
覆土 4層に分層できる。ロームブロックを含んでいるが、レンズ状の堆積から自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子多量
- 2 黒褐色 ローム粒子多量, 焼土粒子微量
- 3 極暗褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量
- 4 黒褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 流れ込んだ土師器片7点(坏1, 甕6)が出土している。

所見 本跡に伴う遺物は出土していないが、近世の第1号溝に掘り込まれることから、18世紀以前に機能していたと推測できる。性格は不明である。



第20図 第4号土坑実測図

表4 近世の土坑一覧表

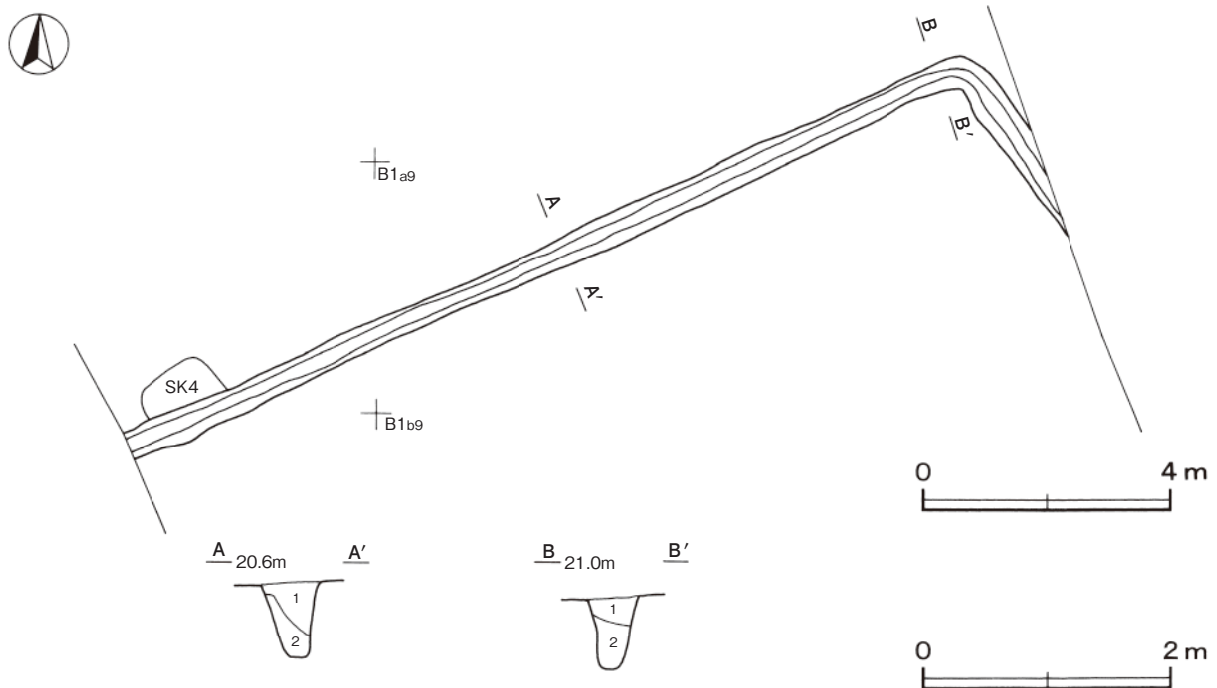
番号	位置	長軸方向	平面形	規模 (m)		深さ (cm)	壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係 (古→新)
				長径×短径 (軸) (軸)							
1	B 2e3	N-32°-W	[隅丸長方形]	2.14 × (0.85)		57	直立・緩斜	凹凸	自然	陶器	
4	B 1a8	N-63°-E	[隅丸長方形]	1.32 × (0.85)		57	直立・外傾	平坦	自然	土師器	本跡→SD1

(3) 溝跡

第1号溝跡 (第21・22図)

位置 調査区中央部のB 1 a8～A 2 j1区で、標高19.8～20.8mの台地緩斜面部に位置している。

重複関係 第4号土坑を掘り込んでいる。



第21図 第1号溝跡実測図

規模と形状 確認できた長さは17.84mで、両端ともに調査区域外に延びている。B 2 a1区から北西方向（N-39°-W）へ直線的に3.5m延び、A 2 j1区で南西にほぼ90度屈曲し（N-115°-W）、直線的に14.6m延び、B 1 a8区で調査区域外に至っている。上幅は0.36~0.58m、下幅は0.16~0.24mである。深さは54~62cmで、底面の標高はコーナー部が最も高く、東端部との比高差は0.22m、西端部との比高差は0.82mである。断面はU字形で、壁は外傾して立ち上がっている。

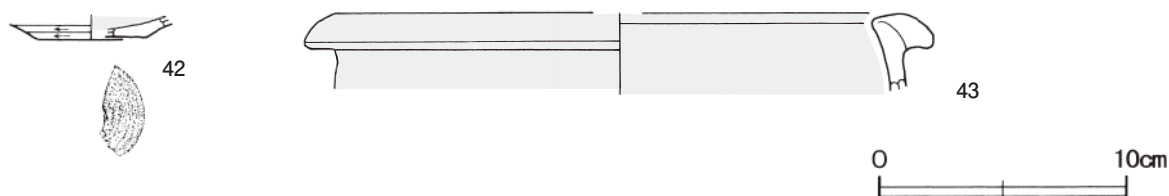
覆土 2層に分層できる。ロームブロックを含んでいるが、レンズ状の堆積状況から自然堆積である。

土層解説

1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 2 暗褐色 ロームブロック多量、炭化粒子微量

遺物出土状況 陶器片2点（灯明皿、甕）のほか、流れ込んだ縄文土器片1点（深鉢）、土師器片11点（甕）、須恵器片4点（坏3、甕1）が出土している。42・43は覆土中層から出土している。

所見 時期は、出土陶器から18世紀代に比定できる。



第22図 第1号溝跡出土遺物実測図

第1号溝跡出土遺物観察表（第22図）

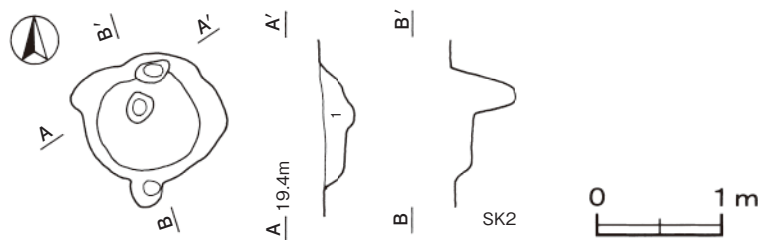
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴など	出土位置	備考
42	陶器	灯明皿	-	(0.9)	[4.2]	緻密	軸赤灰 胎土に多い黄橙	良好	体部下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り 内面鉄軸を施軸	覆土中層	20%
43	陶器	甕	[21.8]	(3.1)	-	緻密・長石	軸暗赤褐 胎土に多い黄橙	良好	口縁部折り返し 内・外面柿軸を施軸	覆土中層	5%

3 その他の遺構と遺物

遺物が出土していないことなどから時期を決定できない遺構として、土坑4基、ピット群1か所が存在する。以下、確認した遺構と遺物について記述する。

(1) 土坑（第23・24図）

今回の調査で、時期・性格ともに不明の土坑4基が確認されている。これらの土坑については、規模・形状等について一覧表と実測図を掲載するにとどめる。



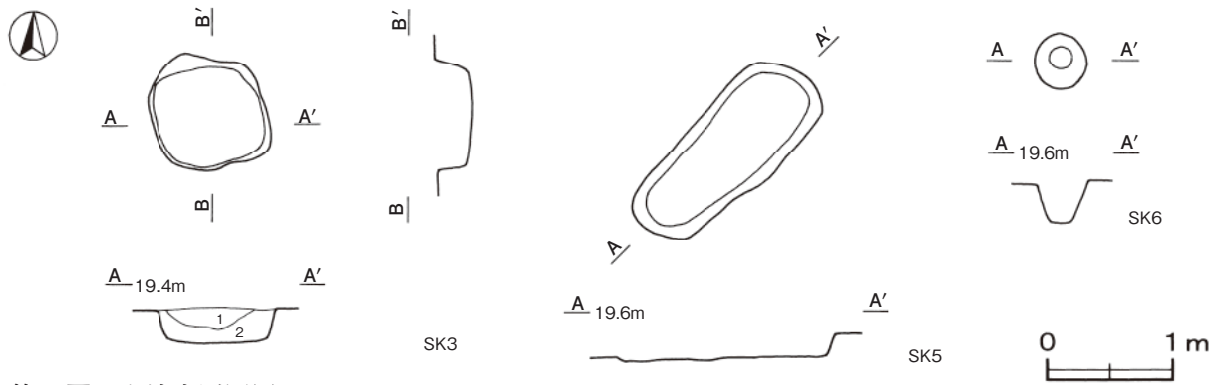
第2号土坑土層解説

1 黒褐色 焼土粒子・粘土粒子微量

第3号土坑土層解説

1 黒褐色 焼土粒子・粘土粒子微量
2 黒褐色 粘土ブロック微量

第23図 土坑実測図(1)



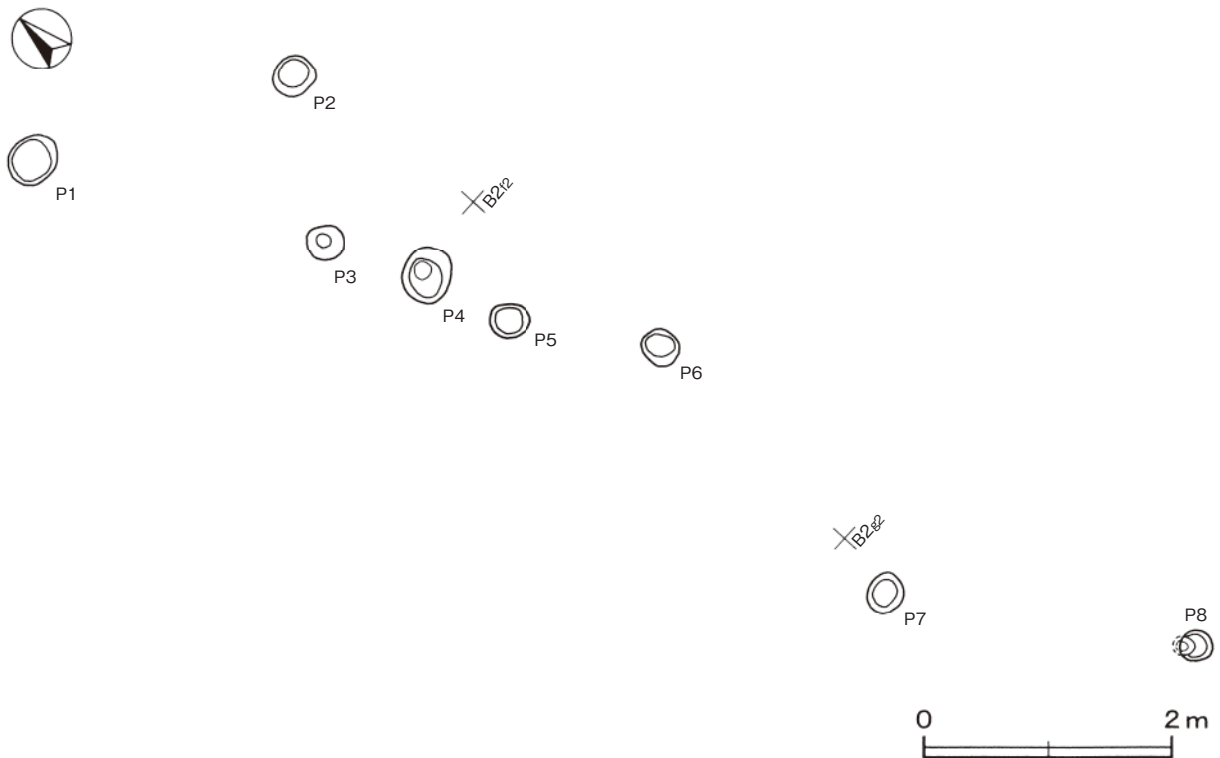
第24図 土坑実測図(2)

表5 土坑一覧表

番号	位置	長軸方向	平面形	規模 (m)		深さ (cm)	壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係 (古→新)
				長径×短径 (軸) (軸)							
2	B 2h2	-	不整形円形	1.08 × 1.06		20	外傾	平坦	自然	土師器	北壁寄りにピット2か所, 南壁外にピット1か所
3	B 2h2	N-19°-W	隅丸方形	0.94 × 0.88		30	直立・ 外傾	平坦	自然	土師器	
5	B 2f1	N-45°-E	長楕円形	1.76 × 0.74		16	外傾	平坦	-		
6	B 2f1	N-7°-W	楕円形	0.46 × 0.40		30	外傾	平坦	-		

(2) ピット群

第1号ピット群 (第25図)



第25図 第1号ピット群実測図

調査区南部のB 2 e1～B 2 g2区にかけての東西3.5m，南北10mの範囲から，柱穴状のピット 8 か所が確認された。平面形は長径25～46cmの円形あるいは楕円形で，深さは10～38cmである。分布状況から建物跡は想定できない。P 8から土師器片 1 点（甕）が出土しているが，時期・性格ともに不明である。

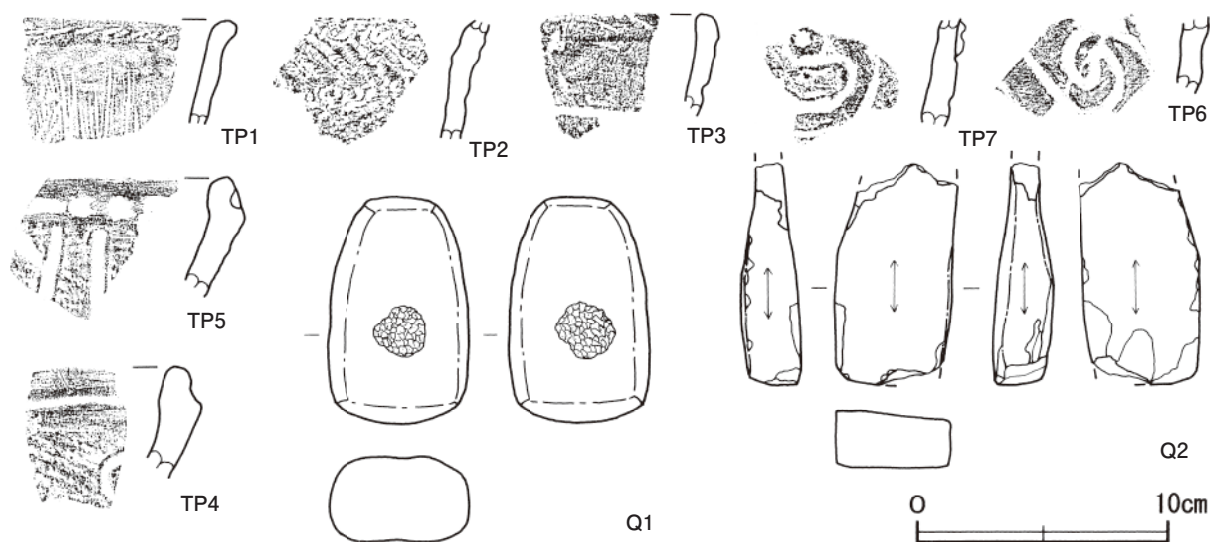
第 1 号ピット群計測表

単位：cm

番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ
1	43	38	20	4	46	41	36	7	35	31	26
2	33	32	10	5	32	27	22	8	25	25	38
3	31	30	23	6	30	30	10				

(3) 遺構外出土遺物（第26図）

今回の調査で出土した縄文土器・石器などの遺構に伴わない遺物について，実測図と観察表を掲載する。



第26図 遺構外出土遺物実測図

遺構外出土遺物観察表（第26図）

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴など	出土位置	備考
TP1	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい黄褐	普通	体部絡条体条痕 口唇部絡条体圧痕文	遺構外	PL8
TP2	縄文土器	深鉢	長石・石英・繊維	灰黄褐	普通	0段多条とループ文の多段構成	遺構外	PL8
TP3	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	灰褐	普通	内・外面ナデ	遺構外	PL8
TP4	縄文土器	深鉢	長石・石英	褐灰	普通	無節L縄文→沈線	遺構外	PL8
TP5	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	褐灰	普通	無節L縄文→沈線	遺構外	PL8
TP6	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄褐	普通	外面ナデ→沈線 内面ナデ	遺構外	PL8
TP7	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	黄褐	普通	沈線→コブ貼付	遺構外	PL8

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴など	出土位置	備考
Q 1	磨石	9.0	5.6	3.9	270.0	安山岩	正・裏面に敲打痕	遺構外	PL8
Q 2	砥石	(8.9)	4.9	2.4	(121.6)	凝灰岩	砥面4面	遺構外	PL8

第4節 ま と め

今回の調査で、上谷田遺跡は奈良・平安時代を中心とした集落跡であることが明らかとなった。調査は遺跡の一部であり、集落はさらに広がっているものと推測されるが、調査事例の少ない当地域で、律令期の様相を知る貴重な資料を示すことができたと思われる。ここでは奈良・平安時代の調査成果を概観することで、まとめとしたい。

1 奈良・平安時代の遺構について

当時代の遺構は、標高19～20mの台地斜面部から竪穴住居跡5軒、土坑2基が確認されている。住居跡の時期は、第1・2・3・5号住居跡の4軒が8世紀前葉に、第4号住居跡が9世紀前葉にそれぞれ比定できる。8世紀前葉の住居跡の分布を見ると、標高20m付近に位置する第1・2号住居跡と、標高19m付近に位置する第3・5号住居跡は約15m離れて存在している。また、主軸方向は、N-13°-W前後の第2・3号住居跡と、それよりやや西に振れる第1・5号住居跡の、2つのまとまりとして捉えることができる。道路幅の限られた範囲の調査のため全容は把握できないが、これらの住居跡はおそらく同一の単位集団に帰属するものと推測でき、同じ集団内に主軸方向を若干違えた住居跡が存在している。この主軸方向の違いが、8世紀前葉期のなかの、若干の時間差によるものなのかどうかは判断できない。

2 奈良・平安時代の遺物について

第1・2号住居跡では、遺物が比較的良好な形で遺存していた。ここでは第1・2号住居跡を中心に、当遺跡から出土した須恵器の産地を確認することで、当遺跡の特徴を捉えてみたい。

須恵器の胎土中における岩石・鉱物の含有の有無を肉眼観察することによって、製作された窯（産地）をある程度限定することが可能であり、遺跡における生産地別の割合を見ることで、須恵器の流通の範囲と消費地（集落）の性格、郡内における集落の性格などを把握することが可能である。茨城県域においては、古代生産史研究会茨城県メンバーの浅井哲也・土生朗治・吉澤悟・佐々木義則・赤井博之各氏らによって、古代の郡単位で、産地別の分布状況が明らかにされている¹⁾。しかし、当遺跡の位置する茨城県西部地域は、調査資料の少なさもあり、十分に把握されているとは言い難い状況にある。今回、古代生産史研究会のメンバーである土生朗治氏、赤井博之氏、及川謙作氏の御協力のもと、当遺跡出土の須恵器について肉眼観察による産地同定を行ない、産地別比率を確認した²⁾。なお、今回は取り上げた資料すべてを分析したものの、総数で28点と少なく、大半が遺存率のよい第1・2号住居跡の出土資料であることから、8世紀前葉段階の傾向を示したにすぎないことをお断りしておく。

当遺跡で確認できた須恵器は、総数28点のうち、第4号住居跡に帰属する4点が9世紀前葉、第7号土坑に帰属する1点が9世紀後葉であるが、それ以外は第1・2号住居跡から出土しているもので、8世紀前葉に位置づけることができる。これら8世紀前葉段階の23点を胎土により分類すると、白雲母の含有を特徴とする新治窯産が23点中11点（48%）と主体的な在り方を示している。新治窯跡群産の須恵器は、白雲母の含有量により、A類（角を持つ白色粒多量、角を持つ透明粒多量、白雲母多量）、B類（角を持つ白色粒多量、角を持つ透明粒多量、白雲母少量、あるいは見られないもの）に分類されており³⁾、当遺跡ではA類が7点、B類が3点である。また猿投産など他地域からの搬入品と考えられるものが3点（13%）ほど確認できた。そのほか小破片で産地の推定が困難なものが2点ある。

表6 当遺跡須恵器の産地一覧

遺構名	時期	番号	器種	産地	遺構名	時期	番号	器種	産地			
S I 1	8世紀前葉	1	坏	上谷田A	S I 2	8世紀前葉	21	甕	新治カ			
		2	坏	新治A			22	甕	他地域			
		3	坏	新治B			23	甕	新治A			
		4	坏	上谷田B	S I 3	8世紀前葉	25	坏	上谷田C			
		5	坏	新治A			26	甕	新治B			
S I 2	8世紀前葉	10	坏	上谷田C	27	甕	他地域	S I 4	9世紀前葉	28	坏	新治A
		11	小形坏	上谷田C	29	高台付坏	新治B					
		12	坏	新治A	30	長頸瓶	新治A					
		13	坏	新治B	33	甕	不明					
		14	坏	上谷田B	S I 5	8世紀前葉	34	坏	不明			
		15	坏	新治A			35	鉢形甕	上谷田B			
		16	蓋	新治A	S K 7	9世紀後葉	38	坏	上谷田C			
		17	蓋	新治A			S K 8	8世紀前葉	41	高台付坏	不明	
		18	長頸瓶	他地域 (猿投産)								

当概期の須恵器23点中7点(30%)が、胎土に新治窯産以外の特徴を持つものであった。これらは大きく次の3つに類別できる。

上谷田A類：不透明白色細粒多量，透明細粒多量で，均一的に含有しているもの。雲母は含まれない。

上谷田B類：白色粒少量，黒色粒⁴⁾を少量含有するもの。雲母は含まれない。

上谷田C類：白色細粒やや多量，透明粒少量，黒色粒をやや多く含有するもの。雲母は含まれない。焼成色調は灰白色である。

これらは坏底部及び底部下端を回転ヘラ削りしたものが多く，製作技術的には新治窯群の須恵器と技術的系譜を同じくしていると考えられる。これらの特徴を持つ土器群を在地的な一群とすると，A類の白色粒はパミス起源の可能性のあることから，三和窯産の胎土に類似するという。ただし三和窯跡群は9世紀以降の操業であることから，時期的には一致しない。ゆえに三和窯跡群内及びその周囲に，より古い段階の窯跡が存在する可能性がある。また下総国岡田郡内では現在までのところ窯跡が確認されていないが，当遺跡のB類・C類の在り方から，未確認の窯跡の存在も否定できない。

以上のように，当遺跡の8世紀前葉段階では，新治窯産須恵器を主体としながらも，新治窯産以外の，おそらく在地窯産と推測される須恵器を一定量使用していることが明らかとなった。また当遺跡の在地系土器の存在から，岡田郡内に未確認の窯跡が存在する可能性も指摘できた。当地域は調査事例が少なく，特に当遺跡の中心の時期である8世紀前葉段階は不明瞭な部分が多い。在地窯産須恵器の詳細は今後の窯跡の確認・調査にゆだねるしかないが，今後，周辺地域を含めた消費地資料の観察を通して，在地窯産の様相を把握し，当地域における須恵器の流通及び古代岡田郡の様相を明らかにしてゆくことが必要である。

註

- 1) a：吉澤悟・赤井博之「茨城県」『東国の須恵器－関東地方における歴史時代須恵器の系譜－』古代生産史研究会 1997年3月
b：赤井博之・佐々木義則「茨城県における須恵器の流通－供膳具を中心とした須恵器の肉眼観察による産地同定と今後の課題」『婆良岐考古』第28号 婆良岐考古同人会 2006年5月
- 2) 産地同定にあたって，(有)毛野考古学研究所土生朗治氏，下妻市教育委員会赤井博之氏，古河市教育委員会及川謙作氏に御指導，御協力いただいた。記して感謝いたします。なお，在地窯産須恵器の胎土分類は，御指導いただいた内容を参考に筆者が行なったものであり，事実誤認等の責は筆者にあることを記しておきたい。
- 3) 新治窯跡産須恵器の胎土分類は以下の文献を参考とした。
赤井博之・佐々木義則「新治窯跡群産須恵器坏A Iの変化－消費地の様相－」『婆良岐考古』第18号 婆良岐考古同人会 1996年5月
- 4) この黒色粒は黒雲母ではなく，角閃石や輝石などの鉱物に由来するものと推測される。

写 真 图 版



出土遺物



遺跡全景（西上空から）



遺跡完掘状況（北から）

PL2



第 1 号住居跡
完 掘 状 況

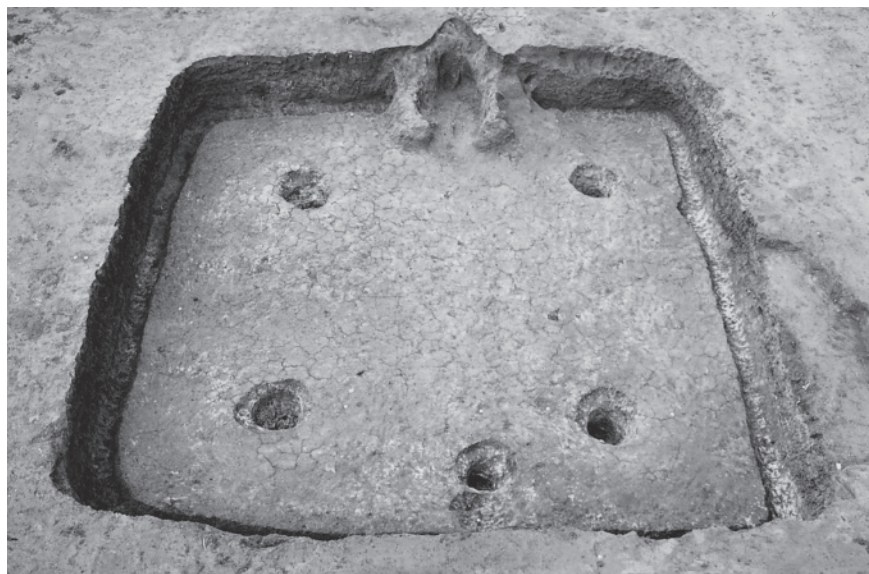


第 1 号住居跡
遺物出土狀況



第 1 号住居跡
竈遺物出土狀況

第 2 号住居跡
完 掘 状 況



第 2 号住居跡
遺 物 出 土 状 況



第 3・5 号住居跡
完 掘 状 況



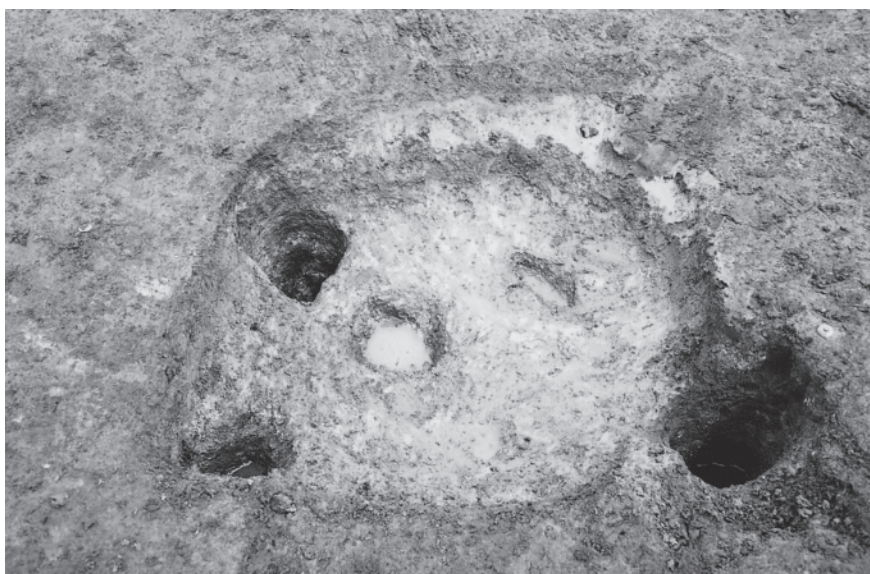
PL4



第 4 号 住 居 跡
完 掘 状 況

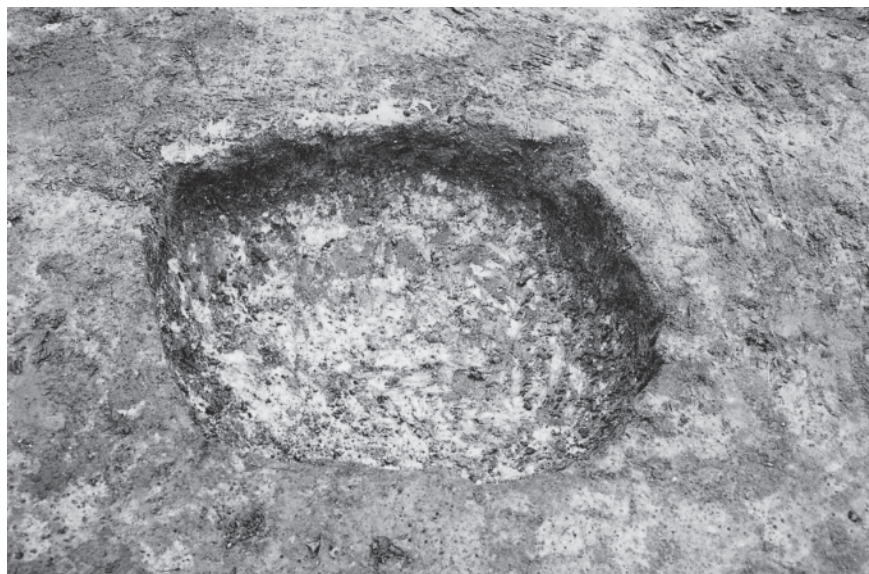


第 1 号 土 坑
完 掘 状 況



第 2 号 土 坑
完 掘 状 況

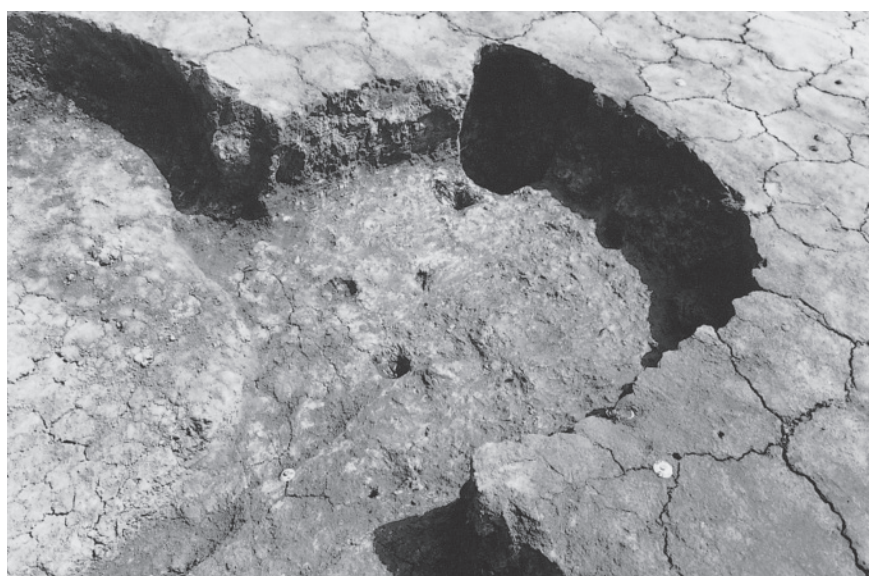
第 3 号 土 坑
完 掘 状 况



第 5 · 6 号 土 坑
完 掘 状 况



第 7 号 土 坑
完 掘 状 况



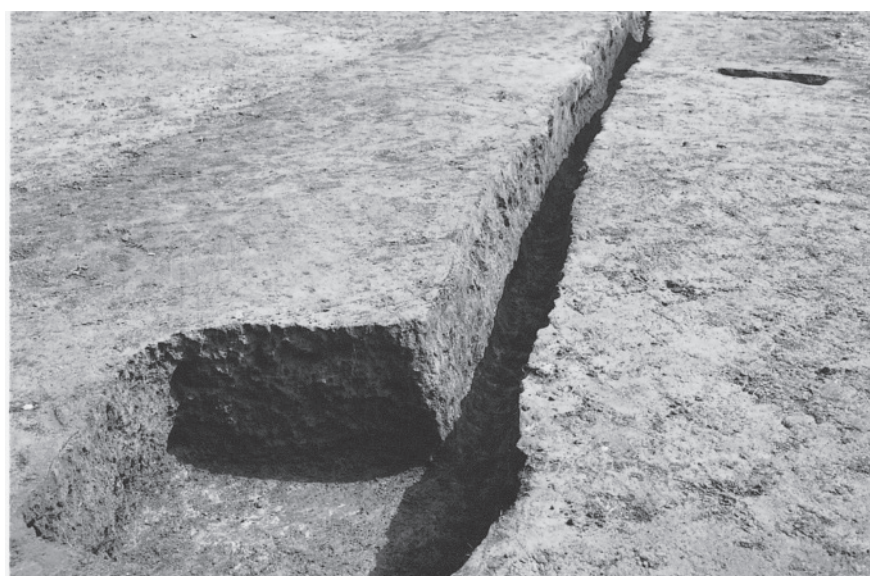
PL6



第 8 号 土 坑
完 掘 状 況



第 1 号 ピ ッ ト 群
完 掘 状 況



第 4 号 土 坑
第 1 号 溝 跡
完 掘 状 況



第1・2号住居跡出土遺物

PL8



SI 1-8



SI 2-13



SI 3-25



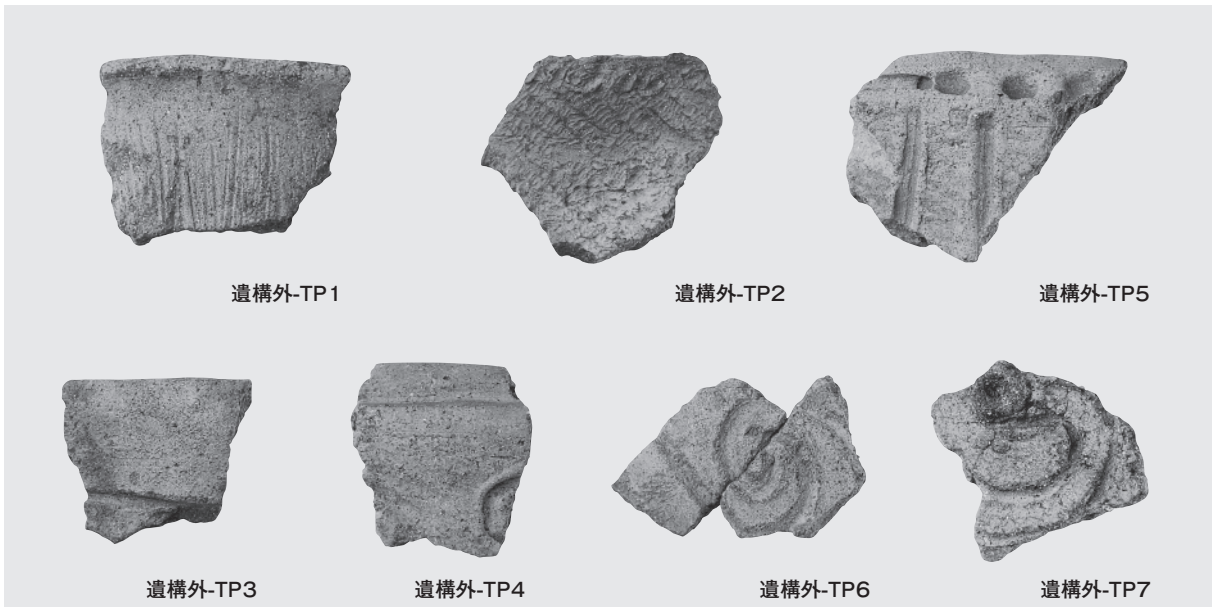
SI 2-20



SI 3-26



SI 2-19



遺構外-TP1

遺構外-TP2

遺構外-TP5

遺構外-TP3

遺構外-TP4

遺構外-TP6

遺構外-TP7



遺構外-Q1



遺構外-Q2



SI 2-DP1



第1・2・3号住居跡・遺構外出土遺物，石器（磨石・砥石），土製品（支脚）

抄 録

ふりがな	かみやたいせき							
書名	上谷田遺跡							
副書名	一般県道高崎坂東線バイパス整備事業地内埋蔵文化財調査報告書							
巻次								
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告							
シリーズ番号	第319集							
著者名	江原美奈子							
編集機関	財団法人茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発行日	2009(平成21)年3月23日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
上谷田遺跡	茨城県常総市 杉山1385番地ほか	08211 - 523086	36度 7分 28秒	139度 56分 45秒	18.6 ~ 21.6m	20070901 ~ 20070930	1,411㎡	一般県道高崎坂東 線バイパス整備事 業に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
上谷田遺跡	集落跡	奈良・ 平安	堅穴住居跡 土坑		5軒 2基		土師器(坏・甕・甑), 須恵器(坏・蓋・瓶・甕)	
		近世	水路跡 土坑 溝跡		1条 2基 1条		土師質土器(皿), 陶器(碗・皿・甕・ 播鉢), 磁器(碗)	
	その他	不明	土坑 ピット群		4基 1か所			
要約	当遺跡は古代には下総国岡田郡に属しており、谷を挟んで約1km北には初期官衙が確認された国生本屋敷遺跡がある。今回の調査では、奈良・平安時代の集落の一部が確認され、古代岡田郡の様相を知る上で貴重な資料となった。また調査区の北側を横断する水路跡は、時期の確定は困難であるものの、近世以降の干拓事業に伴い掘削された可能性があり、当時の水利事業をうかがわせる資料として重要である。							

茨城県教育財団文化財調査報告第319集

上 谷 田 遺 跡

一般県道高崎坂東線バイパス整備
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成21（2009）年 3月18日 印刷

平成21（2009）年 3月23日 発行

発行 財団法人茨城県教育財団

〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内

TEL 029-225-6587

印刷 株式会社 あけほの印刷社

〒310-0804 水戸市白梅1丁目2番11号

TEL 029-227-5505